

# 愛知県立大学付属図書館蔵

## 慶長書写『平家物語』翻刻 卷第十二

近藤政美

本稿は愛知県立大学付属図書館蔵の慶長書写『平家物語』（巻第十二）の本文を翻刻したものである。ただし、この中には巻第十二の後に付された「平家灌頂卷」も入っている。

本書の整理番号は、貴913・4―45、一二巻中の一一巻（巻第三を欠く）、巻第四以降の末尾に「喜福内匠助、慶長拾年八月吉日」という識語がある。

### 凡例

- 一 原本を忠実に翻刻することを期した。
- 二 丁数は本文の始めを一とする。各丁の表裏の初めに丁数とオ（表）・ウ（裏）、各行の初めに行数を記す。
- 三 目次には、前項にしたがって、丁・表裏・行を補う。
- 四 句読点・かぎ括弧は記されていない。便宜上、添える。

五 朱で記された振り仮名・捨て仮名、稀に存する濁点、校異の語句などは、本文の右傍に記す。

六 見せ消ち・書き損じなどの文字は、右肩に\*印を付す。

七 補われている文字は、補入すべき箇所を○印で示し、その右傍に記す。

八 漢字は、印刷の便宜上、現代通用の字体（常用漢字体）・JIS漢字体などに改めたものもある。

例 舵 ↓ 舵、 慰 ↓ 慰、 頸 ↓ 頸、 處 ↓ 処、  
躰 ↓ 体、 候 ↓ 候、 黍 ↓ 桃、 艮 ↓ 養、  
九 変体仮名・合字なども現代通用の字体に改める。

例 り（里） ↓ り、 阿（阿） ↓ あ、 多（多） ↓ た、  
き（帝） ↓ て、 比 ↓ トモ、 ノ ↓ シテ、  
子（振り仮名） ↓ ネ

一〇 誤字・宛字の訂正は、本行の文字の右傍、または振り仮名の

次の括弧内に示した。

例 吊(電)ふ、 狼籍(電)、 保算(下字)、

『平家物語』諸本の略号

- 1 高 | 高野辰之氏旧蔵本(通称「高野本」、東京大学国語研  
究室蔵)
- 2 竜 | 竜谷大学付属図書館蔵本
- 3 米 | 米沢市立図書館蔵本
- 4 内 | 内閣文庫蔵本
- 5 下 | 下村時房刊本(大東急記念文庫蔵)

平家十二巻之目録

一	重衡被斬	一才2
二	大地震	九才7
三	紺搔沙汰	十二才1
四	平大納言被流	十三才2
五	土佐房被斬	十六才3
六	判官都落	二十一才8
七	六代	二十七才4
八	泊瀬六代(長谷六代)	四十四才4
九	同被斬(六代被斬)	四十六才5
十	女院出家	五十才7
十一	小原入 <small>(高・大原入)</small>	五十五才7
十二	小原御幸 <small>(高・大原御幸)</small>	五十八才2
十三	六道沙汰 <small>(下・六道)</small>	六十五才3
十四	女院死去(往生)	七十二才3

一オ1 平家物語卷第十二

2 重衡被斬 一

3 去程に、本三位中将重衡、卿をは狩野介宗茂

4 に被預て、去年より伊豆国におはしけるか、南都

5 の大衆類に申ければ、「さらは可被渡」とて、源三

位

6 入道孫、伊豆藏人、大夫頼兼に仰て、遂に奈

7 良へそ被遣ける。都へは不被入、大津より山科と

をり

8 に醍醐路を經て行は、日野は近かりけり。此北

一ウ1 方と申は、鳥飼中納言惟実の女、五条大納言

2 国綱の養子、先帝の御乳母、大納言佐局とそ

3 申ける。中将、一の谷にて被生捕給て後も、先帝

4 に付まいらせて御座けるか、壇浦にて海に沈給

5 しかは、武のあらけなきに被捕て旧里に帰り、

6 姉、大夫三位に同宿して、日野と云所にそおはし

7 ける。三位中将の露の命、草葉の末に懸て未

8 消遣と聞給て、如何にもして今一度不替姿

二オ1 をみもしみえはやと思て被待けれ共、それも不叶、

2 只泣より外の無慰て、明し暮し給けり。三位

3 中将、守護武士共に宣けるは、「さても此程、各の情

4 深、芳志をはしつること難有うれしけれ。さ

5 ては、最後に芳恩蒙度事あり。我は一人の

6 子なければ、浮世に思置事なし。年来契たり

7 し女房の、日野と云所に有と聞。今一度対

8 面して、後生の事をも申置はやと思ふは如何に」と

二ウ1 宣へば、武士共も岩木ならねは、皆涙を流て、

2 「誠に女房などの御ことは、何かくるしう候へき。と

う

3 く」とて、有奉る。三位中将不斜悦、「大納言、佐

4 殿の御局の、是に御渡候やらん。只今三位の中将

5 との奈良へ御渡候か、立なから御見参に入らん

6 と候」と、人を入れていはせければ、北方、「いつらや

いつら

7 とて、走出てみ給へは、藍摺の直垂に折烏帽子

8 きたる男の瘦黒たるか、縁によりゐたるそ、そ

三オ1 なりける。北方、御簾のきは近出て、「いかにやく、

2 夢かやうつゝか。是へ入給へ」と宣ける御こゑを聞

3 給ふに付ても、只先立物は涙也。三位中将、御簾

4 打かつき、泣く宣けるは、「西国にていかにもなる

へ

5 かりし身の、乍<sup>レ</sup>生被<sup>レ</sup>捕て、京・鎌倉恥をさらす  
 6 たに口惜に、はては南都の大衆の手へ被<sup>レ</sup>渡て可<sup>レ</sup>  
 7 被<sup>レ</sup>切とて罷候。夢ならずして、今一度あひみ  
 8 奉る事もやと存候つるに、今は露程も浮世に  
 三ウ1 思置事なし。出家して、形見に髪をも可<sup>レ</sup>奉<sup>ル</sup>

2 候へ共、かゝる身に罷成て候へは不<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>力」とて、額  
 の

3 髪を引分、口の及<sup>ッ</sup>所を少くひきて、「是を形見  
 4 に御覧せよ」とて被<sup>レ</sup>置ければ、北方、日来おほつか  
 5 なふおほしけるより、今一入思の色をそ増給ふ。良  
 6 あて、北方涙を押して宣けるは、「誠に二位殿・越  
 7 前<sup>、</sup>三位のうへの様に、水底にも沈<sup>ム</sup>へかりしか  
 8 共、正しう此世におはせぬ人とも聞さりしかは、不<sup>レ</sup>  
 四オ1 替姿を今一度見もしみえはやと思てこそ、乍<sup>レ</sup>  
 2 憂今日までもなからへたれ。今までなからへたり  
 3 つるは、若やと思ふ頼も有つる物を、さては今日を  
 4 限にておはすらん事よ」とて、昔今の事共宣かはす  
 5 に付ても、只不<sup>レ</sup>尽物は涙なり。北方、「余に御姿の  
 6 しほれて侍に、奉りかへよ」とて、あわせの小袖に淨

7 衣を副て被<sup>レ</sup>出たり。中将、是をきかへつゝ、日来  
 8 着給へる装束をは、「形見に御覧せよ」とて被<sup>レ</sup>  
 四ウ1 置ければ、北方、「其もさる御ことにて侍共、はか  
 2 なき筆の跡こそ、なかき世のかたみにて侍へ」と  
 3 て御硯を被<sup>レ</sup>出たり。中将、泣く一首の歌をそ書  
 4 給ふ。  
 5 せきかねて涙のかゝるからこも  
 6 後のかたみにぬきそかへぬる  
 7 北のかたの返事に、  
 8 ぬきかふる衣もいまは何かせむ

五オ1 けふをかきりのかたみとおもへは  
 2 後世には奉<sup>ッ</sup>生<sup>ッ</sup>合<sup>一</sup>。必<sup>ッ</sup>一<sup>ッ</sup>蓮<sup>ス</sup>にと祈り給へ。日も闌ぬ。  
 3 奈良へも遠候。武士の侍らんも心なし」とて被<sup>レ</sup>出  
 4 ければ、北方、中将の袂にすかり、「いかにやいかに、  
 5 しは  
 6 し」とて、引留<sup>、</sup>給へは、中将、「心中をは只推<sup>ッ</sup>量<sup>ッ</sup>給ふ  
 7 へし。され共、終にはなからへはつへき身にもあら  
 8 す」とて、思切<sup>ッ</sup>てそ被<sup>レ</sup>出ける。誠に此世にてあひ  
 8 みんな事も是そ限と思はれければ、今一度立  
 五ウ1 帰度は被<sup>レ</sup>思けれ共、心弱<sup>ッ</sup>ては叶はしとて、思切<sup>ッ</sup>て

2 そ被<sub>レ</sub>出ける。北方は、御簾の外までまるひ出、お  
 3 めきさけひ給ける御声の、門の外まで遙に  
 4 聞えければ、中将涙にくれて行先もみえねは、  
 5 駒をも更にはやめ給はず。中く<sub>レ</sub>なりける見  
 6 参哉と、今は悔<sub>クヤシ</sub> そ被<sub>レ</sub>思ける。北方頓走<sub>ル</sub>も出て  
 7 おはしぬへう被<sub>レ</sub>思けれ共、其もさすかなれば、引  
 8 かつゐてそ臥給ふ。去程に、南都の大衆、三位  
 六オ1 中将請取り奉て、如何<sub>ニ</sub>すへきと僉議す。「抑此  
 2 重衡卿は為<sub>ル</sub>大犯<sub>ル</sub>悪人<sub>一</sub>上、三千五刑の内にもれ、修  
 3 因感果<sub>ル</sub>道理極盛<sub>ル</sub>せり。仏敵法敵<sub>ル</sub>逆臣なれ  
 4 は、頗<sub>ル</sub>東大寺・興福寺両寺の大垣を回<sub>ル</sub>して、堀  
 5 頸にやすへき、又鋸てや可<sub>レ</sub>截」と僉議す。老僧  
 6 共の僉議しけるは、「其も僧徒の法には不<sub>レ</sub>穩便」。  
 7 只武士にたうて木津<sub>コヅ</sub>の辺にてきらすへし」とて、  
 8 終に武士の手へそ被<sub>レ</sub>返ける。武士是を請取て、  
 六ウ1 木津河のはたにて既に切奉らんとしけるに、  
 2 数千人の大衆、みる人幾千万と云数を不<sub>レ</sub>知。爰  
 3 に三位中将の侍に、木工右馬允<sub>トモ</sub>知時と云者有。  
 4 八条女院に候けるか、最後をみ奉らんとて鞭を  
 5 うてそ馳たりける。只今既に奉切としける処に馳

6 付、急馬より飛下、千万人立籠たる中を、し  
 7 わけく、三位中将の御傍<sub>ソバ</sub>近参て「知時こそ  
 8 最後を奉<sub>レ</sub>見とて、参て候へ」と申ければ、中将、「志  
 七オ1 の程、誠に神妙なり。あはれ、同<sub>ニ</sub>は最後に仏を奉<sub>レ</sub>拜  
 2 て、被<sub>レ</sub>切はやと思ひかに。余に罪深<sub>ク</sub>覚るに」と宣  
 3 へは、知時、「安程<sub>イ</sub>の御事候」とて、守護<sub>シ</sub>武士に申  
 4 合て、其辺より、仏を一体奉<sub>レ</sub>迎て出来り。幸に  
 5 阿弥陀にてそ御座ける。河原の砂の上にすゑ  
 6 奉り、知時か狩衣の袖のく<sub>レ</sub>りを解て懸<sub>ケ</sub>仏<sub>ノ</sub>御  
 7 手<sub>ニ</sub>中将にひかえさせ奉る。中将、是をひかえつゝ、  
 8 奉<sub>レ</sub>向<sub>レ</sub>仏<sub>ニ</sub>て被<sub>レ</sub>申けるは、「伝聞、調達か作<sub>ル</sub>三逆<sub>ヲ</sub>亡<sub>ニ</sub>  
 七ウ1 八万蔵<sub>ノ</sub>聖教<sub>ヲ</sub>たりしも、終には預<sub>ル</sub>天王如来<sub>ノ</sub>記  
 2 別<sub>ニ</sub>、所作<sub>ノ</sub>罪業誠<sub>ニ</sub>に深<sub>ク</sub>といへ共、聖教に値<sub>テ</sub>遇せ  
 3 し逆縁<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>朽して、還<sub>ル</sub>作<sub>ル</sub>得道<sub>ノ</sub>因<sub>ト</sub>。誠に重衡か  
 4 犯<sub>ス</sub>逆罪<sub>ノ</sub>事、全<sub>ク</sub>非<sub>ニ</sub>愚意<sub>ヲ</sub>発起<sub>ス</sub>。只世の理を存する  
 5 計也。受<sub>レ</sub>生<sub>者</sub>、誰か父命を背<sub>ク</sub>。保<sub>レ</sub>命<sub>者</sub>、誰<sub>カ</sub>王命<sub>ヲ</sub>  
 6 を蔑<sub>ル</sub>如する。彼<sub>レ</sub>云、此<sub>レ</sub>云、辞<sub>ス</sub>無<sub>レ</sub>処。理非、在<sub>リ</sub>仏  
 陀照  
 7 覽<sub>ニ</sub>。抑罪報立<sub>ニ</sub>酬<sub>ニ</sub>、運命已<sub>ニ</sub>只今<sub>ヲ</sub>為<sub>レ</sub>限<sub>ト</sub>。後悔  
 8 千万哀<sub>カナン</sub> 尚有<sub>レ</sub>余<sub>トモ</sub>。但、三宝<sub>ノ</sub>境界は慈悲心をもて

八才1 心とするゆへに、済度良縁区々也。唯円教意、逆

2 即是順、此文肝に銘。一念弥陀仏、即滅無量

3 罪、願は逆縁をもて順縁とし、唯今の最後の念

4 仏によつて、九品託生を可遂」とて、延頸そうたせら

5 れける。日來の悪行はさる事なれ共、唯今の有

6 様み奉るに、数千人の大衆、守護武士共も、みな

7 鎧の袖をそぬらしける。頸をは、般若寺の門の

8 前に、釘付にこそ懸たりけれ。是は、去治承の合

八ウ1 戦の時、此にうたて伽藍を亡し給たりし故とそ

2 聞えし。北方大納言佐殿、「たとひ頸をこそ被刎共、

3 むくろをは取寄て孝養せん」とて、輿を迎に遣

4 す。けにもむくろをは捨置たりければ、是をとて

5 入輿に、日野へ昇てそ帰りける。昨日までは、さし

6 もゆゆしけにおはせしか共、か様にあつきころなれば、

7 いつしかあらぬ様に成給ぬ。是を待請てみ給

8 ける、北方の心中、被推（「レ」を訂す）量て哀也。

さても有へき事

九才1 ならねは、其辺に法界寺と云所あり、さるへき

2 僧共余多かたらふて、孝養有。頸をも大仏の

3 聖、俊乗坊にとかく宣へは、大衆に請て日野へ

4 そ遣しける。頸もむくろも煙になし、骨をは高野

5 へ送、墓をは日野にせせられける。北方も頓

6 様をかへ、如形の仏事をいとなみ給ふそ哀なる。

### 大地震 二

8 去程に、平家亡ひ源氏の代に成て、国は国司

九ウ1 に、順、庄は領家の任也。上下安堵して覚処

2 に、文治元年七月九日の午の剋計、大地おひたし

う動

3 て良久し。赤巢内、白河辺、六勝寺、皆破崩。九

4 重塔も上六重震落。得長寿院も、三十三間、

5 御堂を十七間まで蕩倒。皇居を始て、総在

6 所、神社仏閣、怪しの民屋、さながら破崩る。崩る

7 音は如雷。揚塵は同煙。天暗して日の光も不見。

8 老少共に消魂、朝衆悉尽心。遠国近国も

十才1 如此。山崩埋河、海濛て浸浜。渚漕舟は

2 浪にゆられ、陸行駒は足のたてとを失へり。大地

3 裂て○涌出、盤石破て谷へ転ぶ。洪水漲来は、

4 岳に昇てもなとか助らざらん。猛火燃来は、隔河

5 もしはしは可避。鳥にあらされは、空をも難翔。

龍

6 にあらされは、雲にも又難<sup>レ</sup>上。只悲しかりけるは大  
地

7 震也。白河・六波羅・京中に打うつもるゝ者、いくら  
と

8 云数を不<sup>レ</sup>知。四大種中に、水火風は常に害をなせ

十ウ1 共、於<sup>二</sup>大地<sup>一</sup>。○<sup>(電)</sup>殊<sup>ナ</sup>不<sup>レ</sup>作<sup>レ</sup>変。今度そ世の失はて  
とて、上

2 下、遣戸・障子をたて、天の鳴<sup>リ</sup>地の動<sup>ク</sup>毎<sup>ク</sup>度<sup>ニ</sup>は、声<sup>々</sup>

3 に念仏申、おめき叫事おひたし。八九十、七八十の  
者

4 も、「世の滅するなと云事をは、さすか昨日今日とは  
聞

5 さりし物を」と云ければ、童部<sup>ト</sup>などは是を聞てお

6 めき叫けり。法皇は今熊野へ御幸なて、御花まいら

7 させ給ふ。折節かゝる大地震有<sup>テ</sup>て、触穢出来に

8 ければ、急御輿にめして六条殿へ還御なる。道す

十一オ1 から、共奉の公卿・殿上人、いかはかりか御心を碎<sup>ク</sup>か

せ給ひ

2 けむ。法皇は、南庭に幄屋を立てそ御座ける。主

3 上は、鳳輦<sup>シ</sup>にめして、池の汀へ行幸なる。御所・内

4 裏みなゆり崩しければ、女院・宮は他所へ御幸

5 なる。天文博士、急内裏へ馳参て、「ゆさり亥子の剋

6 には、大地必可<sup>二</sup>打返<sup>一</sup>」とそ申ける。おそろしなとも  
おろ

7 かなり。文徳天皇、斎衡三年三月八日の大地震

8 には、東大寺の仏の御頭を蕩落、又、天慶二年四月

十一ウ1 二日の大地震には、主上御殿を去て、清寧殿の前

2 に五丈幄屋を立てそ御座ける。其は上代の事

3 なれば、如何、有けん。是より後もかゝる事可<sup>レ</sup>有共  
不<sup>レ</sup>

4 覚。十善帝王、都を出させ給て、御身を海底に沈、

5 大臣・公卿被<sup>レ</sup>捕て旧里に帰り、或は頭はねて大路を

6 被<sup>レ</sup>渡。或は妻子に別て遠流せらる。平家の怨

7 霊にて、世のうすべきよし申ければ、心有人々の

8 歎悲まぬはなかりけり。

### 十二オ1 紺搔沙汰 三

2 同八月廿三日、高雄文覚坊、故左馬頭義朝の

3 うるはしき頭とて、尋出して頸に懸、鎌田兵衛か

4 頸をは弟子か頸に懸けさせて、関東へそ被<sup>レ</sup>下ける。

5 去治承四年七月に、謀反を勧申さむか為に、そ

6 そろなるとくろを一、白布に裹て被<sub>レ</sub>奉たりけるを、  
7 世を討取て後までも一向父の首と信られける処  
8 に、又尋出して被<sub>レ</sub>下けり。是は、義朝年来被<sub>レ</sub>召仕  
十二ウ1 ける紺<sub>フシ</sub>搔男、平治の後、獄舎の前なる苔の下に  
2 埋もれて、後世吊人もなかりしを、時の大理に奉<sub>レ</sub>逢、  
3 申請取落、「兵衛佐殿流人でおはすれ共、末頼敷<sub>+</sub>  
4 人也。尋給ふ事もこそあれ」と思ひ、東山円覚寺と云  
5 所に深<sub>カ</sub>蔵て置たりしを、文覚坊尋出して、彼  
6 紺搔男共に相具してそ被<sub>レ</sub>下ける。今日既に鎌倉  
7 へ入と聞えしかは、鎌倉殿、相模河のはたまで御迎に  
8 被<sub>レ</sub>参けり。其より色の姿になりつゝ、鎌倉へこそ被<sub>レ</sub>

帰

十三オ1 けれ。聖をは大床に立、我身は庭に立て、父の頭  
2 を請取給ふそ哀なる。是奉見大名小名、皆袖を  
3 そぬらされける。石巖のはけしきを剪掃て、新  
4 なる道場を造、父の御為と供養して、勝長寿院  
5 と号せらる。公家にもか様の事哀と思食て、故左馬  
6 頭義朝の墓へ、内大臣正二位を贈らる。勅使は左  
7 小弁兼忠とそ聞えし。頼朝卿、武勇の名譽長せ  
8 るによて、立<sub>レ</sub>身興<sub>レ</sub>家のみならず、亡父聖靈、贈

十三ウ1 官・贈<sub>レ</sub>位に及ぬるこそ難<sub>レ</sub>有けれ。

#### 2 平大納言被流 四

3 九月廿二日、平家の余党の都に候を、国々へ可被遣  
4 由、鎌倉殿、公家へ被申たりければ、「さらは可被遣」  
とて、平

5 大納言時忠卿能登国、蔵頭信基安芸国、讃岐中  
6 将時実上総国、兵部少輔正明隠岐国、二位、僧都  
7 全真阿波国、法勝寺、執行能円佐土国、中納言律  
8 師忠快は武蔵国とそ聞えし。或は西海の浪の上、  
十四オ1 或は東<sub>（龍）</sub>国<sub>（國）</sub>の雲のはて、先途何<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>期、後会其期  
2 不<sub>レ</sub>知。別の涙を押つゝ、面々に被<sub>レ</sub>赴けん心の中、  
被<sub>レ</sub>推<sub>レ</sub>

3 量て哀也。中にも平大納言時忠卿は、建礼門院のわ  
4 たらせ給吉田に参て被<sub>レ</sub>申けるは、「最後の暇申さむ  
5 とて、官人共に暫の暇請て参て候。時忠こそ責  
6 重して、今日既配所へ趣<sub>+</sub>候へ。同都の内にも候て、御  
7 あたりの御事共も承はらまほしう候つるに、今より  
8 後、又いかなる御有様共にてか渡らせ給候はんすらん  
と思

十四ウ1 置奉るに、行へき空も覺ましよう候へ」と被<sub>レ</sub>申ければ、



女

2 院、「けにも昔の名残としては、足下計こそ有つれ。今は情をまかけ、問訪人も誰かは有へき」とて、御涙せき

4 あへさせ給はず。抑、この時忠卿と申は、出羽前司具信

5 か孫、贈左大臣時信か子也。建春門院の御せうとにて、高倉上皇の御外戚也。又、入道相国の北方

7 八条二位殿も姉にてそおはしける。兼官兼職、如思如心。されは程なくへあかて、正二位の大納言に

成

十五オ 1 給ふ。檢非違使別当にも三ヶ度まで、成給ふ。此

2 人の庁務時は、竊盜・強盜を召取て、様もなく

3 自耐半ふつと打落く被追捨。されは、悪別当

4 とそ人申ける。主上并三種神器、事ゆへなふ都へ

5 返し入奉れと、西国へ院宣を被遣ける院宣の

6 御使、花形か頬に、浪形と云烙をせられけるも、

偏

7 此時忠卿の為也。建春門院の御形見にも御らんせ

8 ○ほしう思食されけれ共、か様の悪行によて、法皇

十五ウ 1 御憤不浅。判官もしたしうなられたりければ、様く

2 被申けれ共不叶して、終に被流給けり。子息侍從

3 時家とて、生年十六に成給ふか、流罪にももれて、

4 伯父の時光卿許におはしけるか、母上帥亮殿と

5 共に、大納言の袂にすかり、今を限の名残をそ惜

6 まれける。大納言も、「終にすましき別かは」と、心つ

7 よふは宣へ共、今はの時にも成しかは、さこそは悲し

8 う被思けめ。年闌齡傾て後、さしもむつまし

十六オ 1 かりし妻子にも別はて、住狎し都をは雲井

2 のよ所に顧て、古は名をのみ聞し越路の旅に赴

3 て、はるくと下給ふに彼は志賀・唐崎、此は真

4 野の入江、交田浦と申ければ、大納言泣く詠し

5 給ひけり。

6 かへりこむ事はかたに引あみの

7 目にもたまらぬわかなみたかな

8 昨日は西海の浪の上に濛て、怨憎会苦の恨を

十六ウ 1 積扁舟内、今日は北国の雪の下埋れて、愛別

2 離苦の悲を重二故郷雲。

3 土佐房被斬 五

4 去程に、判官には、鎌倉殿より大名十人被付たり

- 5 けるか、内々御不審を蒙給と聞えしかは、一人つゝ
- 6 合<sup>テ</sup>心<sup>ヲ</sup>皆下はてにけり。兄弟なる上、殊に父子の
- 7 契をして、一谷・壇浦に至まで平家を攻亡し、
- 8 一天を鎮<sup>シ</sup>て四海を澄<sup>ス</sup>。勸賞可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>行<sup>ル</sup>処に、いかな

十七オ 1 聞えあてか、かゝるふしきは有らんと、上二人より下  
万

- 2 民に至迄、人皆不審をなす。此事は、此春、摂津
  - 3 国渡辺にて、逆櫓立<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>立<sup>シ</sup>の論をして、梶原大
  - 4 にあさむかれし事を遺恨に思、常は讒言して、
  - 5 終に失けるとそ聞えし。鎌倉殿、「今一日も勢の
  - 6 付ぬ先に、急討手を上て討はや」と被<sup>レ</sup>思けるか、「大
  - 7 名共差上は、宇治・勢田橋をも引、京都の諜<sup>サ</sup>共
  - 8 なた、中々悪かりなむす。いかせん」と被<sup>レ</sup>思け
- るか、

十七ウ 1 爰に召<sup>テ</sup>土佐房正俊、「和僧上て、物詣する様で、  
2 たはかて討」とそ宣ける。土佐房畏承<sup>テ</sup>て御前を  
3 立て、宿所へも不<sup>レ</sup>帰、頓京へそ上げる。土佐房、都  
へ  
4 上<sup>ッ</sup>たりけれとも、次日までは判官殿へも不<sup>レ</sup>参。判

- 5 官、土佐房か上たる由を聞給て、武蔵房弁慶
- 6 をもてめされければ、頓つれてそ参たる。判官、「い
- かに、

十八オ 1 仰候つるは、『今まで都に別の子細の候はぬは、  
2 扱わたらせ給ふ御ゆへと覚候。相構て能く守護せ

- 3 させ給へと申せ』とこそ、仰候つれ」と申ければ、判  
官  
4 「よもさはあらし。義経討<sup>チ</sup>に上たる討手の使也。『大  
名  
5 共差上は、宇治・勢田橋をも引、京都の諜<sup>サ</sup>とも成<sup>ッ</sup>
- 6 て、中々悪かりなんす。和僧上て、もの詣する様で、
- 7 たはかて討』とそ被<sup>レ</sup>仰付<sup>ル</sup>たるらむな」と宣は、土佐  
房
- 8 「何によて、只今さる御事候へき。いさか宿願の

十八ウ 1 細候によて、熊野参詣の為に罷上<sup>ッ</sup>て候。判官、  
2 「さても、景時か讒言によて、鎌倉中へたに被<sup>レ</sup>入す  
3 して、追上らるゝ事は如何に」。土佐房、「其御事はい

かゝ

4 候やらん。於正俊は、全御腹くろ不奉思。起請を書

5 可進由、申ければ、判官、「とてもかくても、鎌倉殿に

6 よしと思はれ奉たる身ならばこそ」とて、以外に気色

7 悪気にみえ給ふ。土佐房、一旦の害を遁れんか為

8 に、居ながら七枚の記請を書て、或は焼て飲、或

十九才1 は社に籠なとして、ゆりてかへり、大番衆の者とも

2 催集て、頓其夜よせんとす。判官は、磯禪師と

3 云白拍子か娘、しつかと云女を最愛せられけり。

4 しつかもかたはらを立さる事もなし。しつか申けるは、

5 「大路は皆武者て侍なる。御内より催の侍さらむに、

6 大番衆の者共の可諫様なし。如何様、是は昼の

7 起請法師かしわさと覚侍。人を遣してみせ侍

8 は、や」とて、六波羅の故入道大相国の被召使ける

十九才1 かふるを三四人被召使けるを、二人みせに遣す。程

経

2 まて不帰。「女は中くくるしからし」とて、はした

もの

3 を遣したりければ、頓走かへて、「かふろとおほしき

4 ものは、兩人ながら土佐房か門に被切臥て侍。宿所

5 の前には、鞍置馬共ひしとひたて、大幕のうちに

6 は、者共鎧取て着、矢かき負、弓をし張、甲の緒

7 をしめ、只今寄せんと出立候。少も物詣の気色

8 とはみえ候はず」と申ければ、判官、「されはこそ」とて、太

二十才1 刀とて出給へは、しつか、きせなかを取てなけかけ

2 奉る。たかひもはかりして出給へは、中門の口に馬に

3 鞍置てひたてたり。判官、是に打乗、「門あけよ」

4 とて、門あけさせ、今やくと待給ふ処に、土佐房正

5 俊、ひた甲五十騎計、惣門の前に押寄て、時を

6 ととそつくりける。判官、鎧蹴張立あかり、大音声

7 を揚て、「夜打にも昼戦にも、義経たやすふ打へ

8 き者は、日本国には不覚物を」とて、おめひて先を

二十才1 かけ給へは、五十騎計の兵共、皆中をあけてそ通し

2 ける。去程に、伊勢三郎義盛・奥州佐藤四郎兵衛

3 忠信・江田源三・熊井太郎・武蔵坊弁慶なと云、一

4 人当千兵共、頓つゝゐて攻戦。其外、侍共、「御内に

夜

5 討入たり」とて、あそこの宿所、こゝの屋形より馳来程  
6 に、判官程なく六七十騎になり給ぬ。土佐房、猛寄  
7 たれ共、たすかる者はすくなふ、被討者そ多かりける。

8 土佐房、希有にして引退、鞍馬の奥へ北籠。僧

二十一オ1 正谷と云所に、北籠たりけるとかや。鞍馬は判官

2 の故山也ければ、彼師、土佐房をからめて、次日、判

3 官殿へ遣す。土佐房は、かちの直垂にしゆつちやう

4 頭巾をそしたりける。判官、縁に立出、土佐房を庭

5 にひすゑさせ、「いかに和僧は、起請にはうてたるそ」

と宣

6 へは、「さ候。ある事に書て候へは、うて候ぞかし」

とそ

7 申ける。判官、重ニ主君命、軽ニ私命。志の程、

誠に

8 神妙也。和僧命惜くは、助て鎌倉へ返し遣さむ

二十一ウ1 は如何、と宣へは、土佐房居なをり畏て、「殿は、

口惜

2 事をも宣物哉。助らうと申は、殿は助給ふへきか。

3 鎌倉殿の、『法師なれ共、己そねらはむする者』と、  
4 仰蒙しより以来、命をは鎌倉殿に奉りぬ。なし  
5 かは取返し奉るへき。只芳恩には、とくく首を  
6 はねらるへし」と申ければ、「さらは切」とて、六条  
河原へ

7 引出てきてけり。不讚人こそなかりけれ。

8 判官都落 六

二十二オ1 爰に足立新三郎と云雑色あり。鎌倉殿、「きや

2 つは下臈なれ共、さかくしきやつにて候。被召

3 使候へ」とて、判官殿に被付たりけるか、内は、

「九郎か

4 振舞みて我にしらせよ」とそ宣ひける。土佐房

5 かきらるゝをみて、夜を日につゐて馳下、此由

6 申ければ、鎌倉殿大に驚。舍弟蒲冠者

7 範頼を討手に上給へき由宣へは、辞し被申

8 けり。叶ましき由を宣問、不及力、物具して、

二十二ウ1 暇申に被参たりければ、鎌倉殿、「わたのも又、九郎

2 か振舞し給ふなよ」と宣ひける御詞に恐をな

3 して、京上は思留、宿所に帰、物具ぬき置、全不

4 忠なき由の起請文を一日に十枚つゝ、昼はかき、

5 夜は御坪の内にて読上く、百日に千枚の

6 起請を書てまいらせられたりけれ(電・とも)。不叶して、

終

7 に被討給けり。去程に、北条四郎時政に六万

8 余騎を指副て、討手に被上由聞えしかは、暫く鎮

二十三才1 西の方へ落行はやと被思けるか、爰に緒方

2 三郎維義は、平家を九国の内へも入奉らすし

3 て、追出す程の多勢の者也。「我に被憑よ」とそ

4 宣ける。「御内に候、菊池次郎高直は、年来の

5 敵て候。給て切て後、頼れ奉らむ」と云ければ、

6 判官、左右なうたうてけり。六条河原へ引出て切

7 てけり。其後維義領状す。同十一月二日、九郎大

8 夫判官義経、院参して、大蔵卿泰経朝臣をも

二十三ウ1 て奏聞せられけるは、「事新申事にて候へとも、

2 摂津国一谷、長門国壇浦に至るまで、平家を攻

3 亡し、一天をしつめて四海をすます。勸賞可被行

4 処に、頼朝、郎等共か讒言によて、義経可討由、

5 つかふまつり候。暫鎮西の方へ落行はやと存候。院

6 庁の御下文を一通、給候ははや。生涯の所望、只此

7 事に候」と被申ければ、法皇、頼朝かかへり聞する

8 処、いかゝあらんすらんと思召し煩はせ給て、諸卿に

二十四才1 仰合らる。諸卿被申けるは、「義経都に候なは、東国

2 の大勢乱入て、京都の狼籍絶(電・とも)ましよう候。暫

3 鎮西の方へ落行候は、其恐候まし」と被申けれ

4 は、「さらは」とて、「鎮西の者共、緒方三郎維義を始

5 として、白杵・戸次・松浦党に至まで、義経か下

6 知に随へし」と云院庁の御下文を給てければ、

7 同三日、京都にいさゝかの煩もなさす、浪風をも不

8 立して、其勢五百余騎てそ被下ける。摂津国

二十四ウ1 源氏、太田太郎頼基、「我門の前をとをしなから、

2 鎌倉殿のかへり聞召れん処も有。一矢射て有

3 へきか」とて、其勢六十余騎、河原津と云所に追付

4 て攻戦。判官は五百余騎、太田太郎は六十余騎、

5 中に取籠て、「あますな、もらすな、討や」とて、散

くに

6 攻給へは、太田太郎頼基、馬のふと腹のふかに射

7 させ、力及はて引退。判官、ふせき矢射ける兵共

8 廿余人か頸切懸、戦神にまつり、悦の時を作、

二十五才1 「門出よし」とそ被悦ける。摂津国大物浦より

2 船にて被下けるか、西の風はけしう吹ければ、判官

- 3 の乗給へる船は、住吉浦へ打上らる。それより吉野へ
- 4 そ被<sub>レ</sub>籠<sub>レ</sub>ける。吉野法師に被<sub>レ</sub>攻て、奈良へ落<sub>ル</sub>。奈
- 5 良法師に被<sub>レ</sub>攻て、又都へ帰上<sub>ル</sub>、北国にかゝて、終に
- 6 奥へそ被<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>ける。判官の都より引くせられたりける
- 7 十余人の女房共、住吉の浦に捨をかれたりけるか、
- 8 或は松の下、或は砂の上に、袖かたしみて泣臥たり
- 二十五ウ 1 けるを、住吉の神官共、憐れんで、乗物をした
- 2 て、皆京へそ送ける。判官のむねと頼まれたり
- 3 ける緒方三郎維義・信太先生義教・十郎蔵人
- 4 行家の船共も、浦々嶋々に打上られて、互に
- 5 其行を不<sub>レ</sub>知。西の風の忽に吹けるは、平家
- 6 の怨霊とそ聞えし。同七日、北条四郎時政、六万
- 7 余騎を相具して上落す。同八日、院参して、伊
- 8 予守源義経・同備前守行家、追討すへき由の
- 二十六オ 1 院宣を可<sub>レ</sub>給由、被<sub>レ</sub>申たりければ、頼院宣をそ
- 2 被<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>ける。去二日、は、義経朝臣の申うくる旨に任
- 3 て、頼朝背へき由の院庁の御下文をなされ、同
- 4 八日、は、頼朝卿の申状によつて、義経可<sub>レ</sub>討の院宣
- 5 を被<sub>レ</sub>下。朝にかはり夕に変ず。只世間の不定
- 6 こそ悲しけれ。去程に、鎌倉殿、日本国の惣
- 7 追補使を給<sub>テ</sub>て、段別に兵糧米を可<sub>レ</sub>宛行<sub>ハ</sub>
- 8 由、鎌倉殿、公家へ被<sub>レ</sub>申たりければ、法皇仰たり
- 二十六ウ 1 けるは、「朝の怨敵を平くる者、半国を給はると
- 2 云事、無量義経にみえたり。頼朝か申状過分也」
- 3 とて、諸卿に被<sub>レ</sub>仰合。諸卿被<sub>レ</sub>申けるは、「頼朝卿の申
- 4 さる旨、其故候」とて、諸国に守護を置<sub>キ</sub>、庄園に
- 5 地頭を補せらる。かゝりしかは、一毛計もかくるへき
- 6 様そなかりける。鎌倉殿、か様の事をは、吉田大納
- 7 言経房卿をもつて被<sub>レ</sub>申けり。此大納言は、うるはしき
- 8 人と聞え給へり。其故は、平家亡<sub>レ</sub>、源氏の世のつ
- 二十七オ 1 よりし後、いかなる人も或は文を下、或は使者を
- 2 遣しなど、様々にへつらはれたりしか共、此大納言
- 3 は、さもし給はず。平家の悪行によつて、法皇を城南
- 4 離宮に押しこめ奉<sub>テ</sub>て、後院の別当を補せられ
- 5 けるには、八条中納言長方卿、此大納言、二人をそ
- 6 後院の別当には被<sub>レ</sub>補ける。権右中弁光房朝臣
- 7 の子也けり。十二年、父朝臣失給ひしかは、みなし
- 8 子にておはせしか共、兼<sub>ニ</sub>帯<sub>ニ</sub>三事<sub>ヲ</sub>頭要<sub>ニ</sub>、経<sub>ニ</sub>夕郎<sub>ト</sub>
- 二十七ウ 1 貫首<sub>ト</sub>、参議・大弁・大宰帥・中納言・大納言に上給
- 2 へり。人をは越<sub>レ</sub>給へ共、人には被<sub>レ</sub>越給はず。されは、

人の善

3 悪は、錐脱<sup>トリス</sup>袋<sup>ツツ</sup>とて、かくれなし。難有かりし大納言也。

#### 六代 七

5 去程に、北条四郎時政は、鎌倉殿の御代官に、

6 都の守護して候けるか、「平家の子孫といはむ

7 人、於男子尋出したらむ輩には、所望、こふによるへ

8 し」と披露せられたりければ、京中の上下、案内

二十八オ1 は知たり、勸賞蒙らうとて尋もとむるそ、うたて

2 き。かかりしかは、いくらも被尋<sup>ヒ</sup>出けり。下臈の子

なれ

3 共、色白<sup>シロ</sup>みめよきをは召出で、「是は何の中將殿の

4 若君」、「是は彼少將殿の君達」など云間、父母泣悲

5 め共、「あれは乳母か申候」、「是は介惜<sup>ウレ</sup>か申」など云

6 間、無下に少<sup>オホ</sup>をは、水に入れ土に埋、少おとなしき

をは、

7 押殺<sup>シ</sup>差殺<sup>ス</sup>。母の悲、乳母か嘆、たとへんかたそなかり

8 ける。中にも小松三位、中將維盛、卿若君、六代

二十八ウ1 御前とておはず也。平家の嫡なる上、年も

2 少しおとなしう御座也。いかにもしてとり奉らんとて、

3 手を分て被尋<sup>ヒ</sup>けれ共、尋かねて、既空<sup>キヤク</sup>しう下らん

4 としける処に、ある女房の六波羅に出て申けるは、

5 「是より西、遍照寺の奥、大覚寺と申す山寺の

6 北のかた、菖蒲谷と申所にこそ、小松三位、中將

7 維盛、卿の北方・若君・姫君忍て御座ませ」と云

8 ければ、北条かしこへ人を遣、其辺を伺はせける

二十九オ1 程に、ある坊に、女房達余多、少<sup>オホ</sup>人々、ゆゝしう忍

た

2 る体にて住るけり。籬の際よりのそひてみれ

3 は、白兔のこの庭へ走<sup>ハ</sup>出たるをとらむとて、よに敵

4 まします若君の、つゝゐて出給けるを、乳母の女房

5 とおほしくて、「あな浅猿。人もこそみまいらせ侍」

とて、

6 急引入奉る。是そ一定そにてましますらんと思、

7 急走<sup>ハ</sup>帰て、此由申しければ、北条、次日かしこへ打向、

四

8 方打かこみ、人を入れて被申されけるは、「小松三位、中

將維盛

二十九ウ1 卿の若君、六代御前の、御渡候と承て、鎌倉殿の

2 御代官に、北条四郎時政と申者御迎に参て候。

3 とうく出しまいらさせ給へ」と被<sub>レ</sub>申ければ、母上  
夢の

4 心ちして、つやく物も覚給はず。斎藤五・斎藤六、  
5 走回<sub>レ</sub>て其辺をみけれ共、武士共、四方打かこんで、  
6 何方より出しまいらすへし共不<sub>レ</sub>覚。母上は若君を  
7 かゝへ奉て、「只我を失」とて、おめき叫<sub>レ</sub>。日来は物  
をた

8 に高いはす、忍つゝかくれ居たりしか共、今は  
三十 才1 家のうちにありとある物、声を調<sub>レ</sub>て泣悲しむ。北

2 条も、よに哀けに思給て、涙を押てつくくとそ  
3 またれける。良あて、重て被<sub>レ</sub>申けるは、「世も未しつ  
4 まり候はねは、しとけなき御事もそ候とて、御迎に  
5 参<sub>レ</sub>て候。別の子細は候まし。とうく出しまいらさせ  
6 給へ」と被<sub>レ</sub>申ければ、若君、母上に申させ給ひける  
は、  
7 「終にはのかるましよう候上、はやくいたさせおほし  
ませ。

8 武士共、打入<sub>レ</sub>てさかす程ならば、中くうたてけなる  
三十 ウ1 御有様共もみえさせ給候なんす。縦<sub>レ</sub>罷<sub>レ</sub>て候と  
も、

2 暫もあらは、暇請<sub>レ</sub>て帰参り候はん。いたうな嘆かせ給  
ひ

3 ぞ」と、慰め給ふこそいとおしけれ。さても有へき事  
な

4 らねは、泣く物着せまいらせ、御くしかきなて、出し  
5 まいらさせ給ひけるか、黒木の珠数の、ちいさう廠  
6 を取出て、「是にて如何にもならんまで念仏申て、

7 極楽へ参よ」とて奉り給へは、若君是を取て、「母上  
8 には今日既に離<sub>レ</sub>まいらせ候なむす。今はいかにもし

三十一 才1 て父のましまさん所へそ参度」と宣へは、御妹の姫  
2 君の、生年十に成給けるか、「我も父御前の御許へま  
3 いらん」とて、走出給ひける。乳母の女房、取留奉る。

六代

4 御前、今年十二に成給へ共、よの人の十四五よりも  
5 おとなしく、みめかたち廠<sub>レ</sub>、心様優におはしければ、  
敵

6 によはけみえしと、おさふる袖の隙よりも、余て涙そ  
7 こほれける。さて、御輿に乗給ふ。武士共打かこんで  
8 出にけり。斎藤五・斎藤六も、御輿の左右に付てそ  
三十一 ウ1 参ける。北条、乗替共おろして、「馬に乗」といへと



も

2 不<sup>レ</sup>參、大覺寺より六波羅まで、かちはたしにてそ走  
 3 ける。母上・乳母女房、天に仰<sup>上</sup>地に臥て、もたへこか  
 れ

4 給けり。「此日来、平家の子共取集て、或は水に入  
 5 土に埋、或は押殺<sup>シ</sup>差殺<sup>シ</sup>、様<sup>々</sup>にすと聞れば、我  
 6 か子をは、何としてか失はむすらん。少<sup>シ</sup>おとなしけれ  
 は、

7 頸をこそ切らんすらめ。人の子は乳母などの許に  
 8 遣して、時<sup>々</sup>みる事も有。それたにも恩愛の道  
 三十二才 1 は悲習そかし。況是は、うみ落て後、一日片時<sup>カ</sup>

2 も身をはなたす。人のもたぬ物もちたる様に思  
 3 て、朝夕<sup>フツリ</sup>兩人の中にてそたてし物を。頼みを懸し  
 4 人にもあかて別し後は、兩人をうらうへに置きてこ  
 5 そ慰つるに、一人はあれ共一人はなし。今日より後は  
 6 いか<sup>々</sup>せむ。此三年<sup>ト</sup>か間、夜昼<sup>ト</sup>肝心<sup>ト</sup>をけしつ、思ひ  
 7 まうけたる道なれ共、さすか昨日今日とは不<sup>レ</sup>寄<sup>レ</sup>思。  
 8 年来は長谷の観音をこそ、さり共と深<sup>ク</sup>頼

三十二ウ 1 奉つるに、終被<sup>レ</sup>捕ぬる事の悲さよ。只今もや失<sup>ト</sup>  
 2 つらん」とかきくとき、袖を顔に押当て、さめく

3 とそ被泣ける。夜になれ共、胸せきあくる心地し

4 て、露もまどろみ給さりけるか、乳母女房に宣けるは、  
 5 「只今ちとまどろみたる夢に、此子か白馬に乗<sup>ル</sup>

6 て来りつるか、『余に御恋しう思まいらせて、暫の  
 7 暇請て参<sup>ッ</sup>て候』とて、そはにつる居て、何とやらん、  
 よに

8 うらめしけにて有つるか、程なく打驚かれて、若や  
 三十三才 1 とかたはらをさくれ共、人もなし。夢なり共、暫もあ

2 らて覚ぬる事の悲さよ」とそ語給ける。去程

3 に、長夜もいと、明しかねて、涙に床も浮計なり。

4 かきり有れば、鶏人唱<sup>テ</sup>曉<sup>テ</sup>て夜も明ぬ。斎藤六、帰

5 参たり。母上、「さて、いかにや」と問給へは、「今ま  
 ては別の

6 御事も候はず。是に御文の候」とて、取出て奉る。

7 是を開て見給に、「今まては別の子細も候はず。

8 如何に御心苦敷思召され候らん、いつしか誰<sup>々</sup>も御

三十三ウ 1 恋しうこそ思まいらせ候へ」と、よにおとなしやかに  
 書

2 給へり。母上、是を取て懐に入、とかうの事も不<sup>レ</sup>宣、

3 引かつゐてそ臥給ふ。かくて、時刻遥<sup>々</sup>推うつりけ

4 れは、「時の程もおほつかなう思まいらせ候。御返<sup>へ</sup>

5 事を給て、帰参候はん」と申ければ、母上泣く御返

6 事書てたうてければ、斎藤六、暇申て出にけり。

7 乳母女房、せめての心のあられすにや、走出て、

8 其辺を足に任せて泣あるく程に、ある人の申

三十四才 1 けるは、「此奥に、高雄と云ふ山寺あり。其聖、文

2 覚坊と申人こそ、鎌倉殿にゆゝしき大事の

3 人に被<sup>レ</sup>思まいらせてましますか、上臈の御子を

4 弟子にせんとて、ほしからるゝなれ」と云ければ、う

5 れしき事をも聞ぬと思、母上に角共申さ

6 す直に高雄に尋入、聖に向奉て、「ちの中よ

7 りいたきあけ奉り、おふしたてまいらせて、今

8 年は十二になり給つる若君を、昨日武士にと

三十四ウ 1 られて侍也。御命乞請て、御弟子にせさせたま

2 ひなんや」とて、聖の御前に倒臥、声も不<sup>レ</sup>惜

3 おめき叫<sup>け</sup>。誠せんかたなけにそみえたりける。聖、む

4 さんに思て、事の子細を問給ふ。良あておきあかり、

5 涙を押して申けるは、「小松三位中將維盛、卿の北

6 の方の、御したしうまします人の若君を養ま

7 いらせて侍つるを、若中將殿の若君とや人の申

8 て侍けむ、昨日武士にとられて侍ふなり」。聖、「武

三十五才 1 士を誰とか云つらん」。北条とこそ名乗申侍

2 つれ。「いてさらは行てみむ」とて、つき出ぬ。此詞

を

3 頼へきにはあらね共、思<sup>ひ</sup>計もなかりつるに、すこし心

4 もとり延て、急大覚寺へそ参ける。母上は、「身を

5 なけに出ぬるやらんと思て、我もいかなる洩河にも

6 身をなけはやなと思ひゐたれば」とて、事の子細

7 を問給ふ。聖の被<sup>レ</sup>申つる様を、ありのまゝに語申

8 たりければ、「哀、さらはこひ請て、今一度見せよか

し」

三十五ウ 1 とて、うれしさにも、只先立物は涙也。聖、六波羅

2 に出て、ことの子細を問給ふ。北条被<sup>レ</sup>申けるは、「鎌

3 倉殿の仰に、『平家の子孫といはん人、男子に

4 をひて○失<sup>は</sup>へ<sup>（電：尋いたして失ふへし）</sup>』と仰を蒙<sup>つ</sup>て候。末々の君達を

は、

5 此程少く取奉て候へ共、中にも小松三位中將維

6 盛、卿の若君、六代御前、故中御門新大納言成

7 親、卿の娘の腹に有と聞。いかにもして召取て

8 失はむとて、手を分て尋候つれ共、尋かねて、

三十六オ 1 既に空しう下らんとし候つる処に、思はさる外、一

2 昨日聞出て、昨日是へ迎奉て候へ共、余に敵

3 ましく候之間、未菟も角もし奉らて置奉

4 て候」と被し申ければ、聖、「いてさらは見まいらせむ」

5 とて、若君のわたらせ給ふ処に参てみまいらせ

6 給ふに、二重織物の直垂に、黒きの珠数手に

7 ぬき入て御座ます。髪のかゝり、姿、ことから、誠に

8 あてに敵、此世の人ともみえ給はず。今夜打とけ

三十六ウ 1 てまともみ給はぬかと覚しくて、すこしおも

2 やせ給へるにつけても、いと心苦しう、らうたく

3 そ被し思ける。若君、聖を御覧して、如何おほし

4 けむ、涙くみ給へは、聖もすそろに墨染の袖

5 をそぬらされける。末の世には、いかなるあた敵と

6 成給ふと云共、争か失ひ奉るへきと被し思

7 れは、北条に向て宣けるは、「先世の事にや候らん、

8 此若君をみまいらせ候へは、余にいとほしうおもひ

三十七オ 1 まいらせ候。何かくるしう候へき、廿日の命を延て

2 たへ。鎌倉殿に参て、申有し奉らむ。文覚か、鎌

3 倉殿を世にあらせ奉らんとて、院宣伺に上るに、

4 案内も不知富士川に、夜渡かゝて、押流されん

5 としたりし事、高市山にてひはきにあひ、から

6 き命計生つゝ、福原の籠の御所に参て、院

7 宣申出て奉し時の御約束には、「縦いかなる大

8 事をも申せ、聖か申さむ事をは、頼朝か一期か

三十七ウ 1 間は、かなへむ」とこそ宣ひしか。其外度々の奉公、

2 且み給し事共なれば、事あたらしう、始て申へ

3 きにあらず。契を重して、命を軽す。鎌倉殿に

4 受領神付給はずは、よも忘給はし」とて、頓其暁

5 立にけり。斎藤五・斎藤六、聖を生身の仏の如く

6 に思て、手を合て涙を流。是等大覚寺に参

7 て、此由申ければ、母上いかはかりうれしう被し思

8 けむ。され共鎌倉殿のはからひなれば、如何あらん

三十八オ 1 すらんと被し思けれ共、廿日の命の延給にそ、母上

2 ・乳上の女房、少心も取延て、偏長谷の観音の御助

3 なれはと、頼しうそ被し思ける。かくして明暮させ

4 給ふ程に、廿日の過るは夢なれや、聖も未みえ給は

5 す。「是はされは何と成ぬる事共そや」と、中く心

6 るしくて、今更又もたへこかれ給ひけり。北条も、

「聖

7 の廿日と被<sub>レ</sub>仰し、約束の日数も過ぬ。今は鎌

8 倉殿御有されなきにこそあなれ。さのみ在京して、

三十八ウ1 年を暮すへきにあらず。今は下らん」とて、ひしめき

2 けり。斎藤五・斎藤六も肝心を消て思へ共、聖も

3 未みえず、使者をたにも上せぬは、思計そなかりける。

4 是ら、又大覚寺に参り、「聖も未みえ候はず。北条も

5 暁下向仕候」とて、涙をはらくと流す。母上、当

6 時、聖のさしも頼しけに申て下ぬる後は、母上・乳母、

7 女房、少心も取延て、偏に観音の御助にこそと頼

8 しよう被<sub>レ</sub>思つるに、既暁にも成しかは、いか計の事を

三十九オ1 か被<sub>レ</sub>思けん。乳母、女房も泣けり。又、家の内にあり

と

2 有物、声を調て泣悲しむ。「あはれ、おとなしやかな

らん

3 する者の、『聖の行あはん所まで、六代をくせよ』と

い

4 へかし。若乞請て上らむするに、先に切たらんする

5 心憂さをは如何、せん。さて、頓失ひけなりつるか

と

6 問給へは、「此暁の程とこそみえさせましく候へ。

其故は、

7 此程御とのる仕候つる北条の家子・郎等共、よに

8 名残惜気に思まいらせて、或は念仏申者も候。

三十九ウ1 或は涙を流者も候」と申。母上、「さて此子は何とし

て

2 有そ」と問給へは、「人のみまいらせ候時は、さらぬ

体にも

3 てなひて、御珠数をくらせましく候。人のみまいら

4 せ候はぬ時は、かたはらに向せ給て、御袖を御顔に押

5 当て、涙にむせはせ給ひ候」と申す。母上、「さこそ

有

6 らめ。をさなければ共、心よにおとなしやかなる者也。

今夜

7 限の命と思て、さこそは心細かりけめ。『暫も有は、

暇

8 請て帰参らん」と云しか共、既に廿日に余に、あれへ

四十 オ1 も行す、是へもみえず。又何の日何の時、必逢みる

2 へしとも覚す。さて、汝等は何、はからふ」と宣

3 は、「是は何、までも御供仕、いかにせましまさ

は、

4 御骨を取奉り、高野の御山に納奉り、出家

5 入道仕て、御菩提を吊まいらせ候はん」と申ければ、

6 母上、「さらは時の程もおほつかなうおほゆるに、と

う婦

7 れ」と宣へは、二人の者共、泣く暇申て罷出。去程に、

8 同十二月十七日の暁、北条四郎時政、若君具し

四十 ウ1 奉て既都を立にけり。斎藤五・斎藤六も、御輿

2 の左右に付てそ下ける。北条、乗替共おろして、

3 「馬に乗」といへ共、不乗。「最後の御供て候へは、

苦敷

4 候まし」とて、血の涙を流つゝかちはたしにてそ下け

5 る。若君は、さしもはなれかたふおほしける母上・乳

母

6 女房にも別はてゝ、住なれし都をは雲井にかへり

7 みて、今日を限の東路に、遙々と下られけむ心

8 の中、推量られて哀也。駒をはやむる武士あれ

四十一オ1 ○、我頸うたんかと肝を消、物云かはす者あれば、既

今

2 やと心を尽す。四の宮河原と思へ共、関山をも打越

3 て、大津浦に成にけり。栗津原かとうかゝへ共、今日

4 も既暮にけり。国々宿々、打過ぎく通ぬ。駿河、

5 国にも成しかは、若君の露の御命、今日を限とそ

6 みえたりける。千本松原と云所に御輿かきすゑ

7 させ、武士共折居て、敷皮しみてわか君すゑ

8 奉る。北条四郎時政、若君の御そは近参て被

四十一ウ1 申けるは、「是まで具し奉り候事、別の子細ては

2 候はず。若道にて聖にや行あひ候と、待すく

3 しまいらせつる也。山のあなたにては、鎌倉殿の御

4 心中もはかりかたふ候へは、近江国て失まいらせた

5 ると披露仕候はん。誰申候共、一業所感の御事

6 なれは、よも叶はせ給候はし」と被申ければ、若君、

菟も

7 角も其返事をはし給はず。斎藤五・斎藤六を召

8 て、「あなかしこ、汝等都へ上て、道にて我被切たり

とは

四十二オ1 申へからず。其故は、終にはかくれあるましき事なれ

2 とも、まさしう此有様を聞給て嘆給は、心苦敷

3 て、草の陰にても後世のさはりともならんするぞ。

4 『鎌倉まで送付て参て候』と申へしと宣へ

5 は、二人の者共、涙をはらくと流す。良あて、

- 6 齋藤五、涙を押して申けるは、「君にをくれまいらせん
- 7 なむ後、一日片時命生て都まで参へしとも
- 8 「不覚」とて、又、涙を押して臥にけり。既今はの

四十二ウ 1 時にも成しかは、御髪シヅメの肩カドに懸たりけるを、ちい

- 2 さう敵御手をもて、前へかきこし給へるを、守護
- 3 武士共みまいらせて、「あないとおし、未御心のまします
- 4 よ」とて、皆鎧の袖をそぬらしける。既に西に向ひ、
- 5 手を合、高声に十念唱給て、頸をのへてそ
- 6 被待ける。狩野工藤三親俊、切手にえらまれ、太刀
- 7 を引そはめて、左の方より若君の御後に立回、既
- 8 切奉らんとしけるか、目もくれ心も消はて、何に太

四十三オ 1 刀を打付へし共不覚。前後不覚に覚えけれ

- 2 は、「仕共存候はず。他人に被仰付候へ」とて、太刀を捨て
- 3 そのきにける。「さらは、あれ切」、「これ切」とて、切手をえ
- 4 らふ処に、墨染の衣袴着て、月毛なる馬に乗
- 5 たる僧一人、鞭をうてそ馳たりける。「あないとおし、

あ

- 6 の松原の中に、よに敵まします若君を、
- 7 北条殿の只今きらせ給ふそや」とて、者共ひし
- 8 く」と走り集ければ、此僧、「あな心憂」とて、手を

あ

四十三ウ 1 かるて招けるか、猶おほつかなきに、きたる笠をぬ

- 2 き、指上てそ招ける。北条、「子細有」とて待処に、
- 3 此僧馳来り、急馬より飛下、「若君ゆるさせ給
- 4 たり。鎌倉殿の御教書、是に有」とて、取出て
- 5 奉る。是を開てみ給ふに、「誠や、小松三位中将維
- 6 盛卿の子息、六代御前、尋出されて候なる。高雄
- 7 の聖の御房の乞請イケンと候。疑をなさず被預へし。
- 8 北条四郎殿へ頼朝」とあそはひて、御判あり。推

四十四オ 1 返し／＼三返ようて、「神妙に」とて打をかれければ、

- 2 齋藤五・齋藤六は云に不及、北条の家子・郎等共
- 3 も、皆悦の涙を流しける。
- 4 長谷六代 八
- 5 去程に、文覚坊も、「若君乞請奉りたり」とて、
- 6 きそく誠にゆしけ也。「此若君の父、三位中将
- 7 殿は、初度の合戦の大將ておはすれば、誰申共
- 8 叶ましき由宣つれば、文覚か心をやふては、争か

四十四ウ1 冥加もおはすへきなと、様々悪口申つれとも、猶も叶

2 ましとて、那須野の狩に下給ひし間、剩文覚も

3 狩庭の供して、様々に申て乞請たり。いかにをそふお

4 ほしつらん」と宣へは、北条被<sub>レ</sub>申けるは、「聖の廿日

と

5 被<sub>レ</sub>仰し約束の日数も過ぬ。今は鎌倉殿御有

6 されなきそと心得て、具し奉<sub>テ</sub>下候程に、かしこ

7 うそ。唯今爰にてあやまち仕らん」とて、鞍置

8 て引かせたる馬共に、斎藤五・斎藤六を乗て

四十五オ1 上せらる。我身も遙に打送、「今暫も御供可<sub>レ</sub>申

2 候へ共、鎌倉に指て申へき大事共、余多候。暇申

3 て」とて、其より互に打別てそ被<sub>レ</sub>下ける。誠に

4 情ふかゝりけり。去程に、文覚坊、若君請取奉<sub>テ</sub>、

5 夜を日につゐる程に、尾張<sub>ノ</sub>熱田<sub>ノ</sub>の辺

6 にて、今年も既暮にけり。明る正月五日の夜

7 に入て都へ上着、二条猪熊なる所に文覚房の

8 宿所有ければ、其へ入奉り、暫休奉<sub>テ</sub>、夜半計

四十五ウ1 に大覚寺へそおはしたる。門をたゞけ共、人なければ、

2 をともせず。若君のかひ給ける白<sub>ク</sub>のこの、築地

3 のくつれより走出て、尾を振<sub>ッ</sub>て向けるに、「母上

4 は何にましますそ」と被<sub>レ</sub>問けるこそ、いとをしけれ。

5 斎藤六、築地を越え、門を開て入奉る。近<sub>ノ</sub>人の住た

6 る所共みえず。「是はされは何と成給ぬる事とも

7 そや。人目も不知、いかにもして命をいかうと思し

も、

8 恋しき人々を今一度みはやと思ふ為也」とて、よも

四十六オ1 すから歎<sub>キ</sub>悲給ふそ、誠に理と覺て哀なる。

2 夜を待明し、近<sub>ノ</sub>里の者共に問給へは、「年の内は

3 大仏まいりと承候しか。正月の程は、長谷寺に御

4 籠とこそ承候へ。近<sub>ノ</sub>御宿所へ人の通<sub>カ</sub>ともみえ候はず

5 と申ければ、斎藤五、急走下、母上に尋逢奉<sub>テ</sub>、

6 此由申ければ、急上<sub>ラ</sub>せ給て、若君を見まいらせ

7 給に付ても、唯不<sub>レ</sub>尽物<sub>ノ</sub>涙也。母上、「はやく出家し

8 給へ」と有しか共、文覚惜て出家をもせさせ給は

四十六ウ1 す。頓高雄に迎へ取て、母上のかすかなる有様を

2 も、常に扶持しけるとそ聞えし。観音の大慈大悲

3 は、罪有をも無<sub>キ</sub>罪も助給ふ事なれば、昔もかゝる

4 ためし多といへとも、有難かりし事共也。

5 六代被斬 九

6 六代御前、漸々十四五にも成給へは、みめかたち殿

あ

7 たりもてりかゝやく計也。母上是をみ給ひて、「世の  
8 世にてあらましかは、此比は近衛司にてあらんする物

四十七才 1 を」と宣けるこそ余事なれ。去程に、鎌倉殿、便宣

2 ことに高雄の聖の許へ、「さても預け奉し小松三位中

3 将維盛卿の子息、六代御前は如何様に候やらん。昔

4 頼朝を相し給し様に、朝の怨敵をもたいらけ、

5 父の恥をも雪むへきほととの者にて候やらん」と被<sub>レ</sub>申

6 ければ、聖の返事には、「是は底もなき不覚仁にて

7 候ぞ。御心安思召候へ」と被<sub>レ</sub>申ければ、鎌倉殿、猶

も心

8 ゆかすけて、「謀反をこさは、頓かたうとせむする聖

四十七才 1 御房也。但、頼朝か一期間間は、誰か傾<sub>ム</sub>へき。子孫の

末そ

2 不知」と宣ひけるこそ、おそろしけれ。母上此由を

聞

3 給て、「はやく出家し給へ」と有しかは、六代御前、

十

4 六と申し文治五年の春の比、よに厳しき御髪を

5 肩のまはりに剪落、柿の衣・袴・笈<sub>イ</sub>など用意

6 して、修行にこそ被<sub>レ</sub>出けれ。斎藤五・斎藤六も同し

7 様に出立<sub>ッ</sub>て御供仕。先高野へまいらせ給て、父の善

8 知識したりける滝口入道に尋逢<sub>テ</sub>て、御出家の

四十八才 1 次第、御臨終の有様、委う尋聞給て、且は其御

2 跡も床敷とて、熊野へこそ被<sub>レ</sub>参けれ。浜宮王子

3 御前にて、父の渡り給ひたりける山なりの嶋を

4 見渡して、わたらまほしくは被<sub>レ</sub>思けれ共、浪風向<sub>ッ</sub>て

5 叶はねは、不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>力なかめやり給ふに、「我父はいっ

くにか

6 沈給ひけん」と、沖よりよする白浪にも、とはまほし

う

7 そ被<sub>レ</sub>思ける。渚の砂も父の御骨やらんとなつかし

8 くて、涙に袖はしほれつゝ、塩くむ海士の衣なら

四十八才 1 ねとも、かはくまなくそみえられける。渚に一夜逗留

2 して、終夜経よみ念仏して、明ぬれは貴僧を請

3 して、浜の砂に指の先<sub>サ</sub>にて仏のかたちを書あらはし、

4 作善の功德、さなから聖靈に廻向して、亡者に

5 暇申つゝ、都へ帰被<sub>レ</sub>上けり。其比の主上は、御遊を

宗とせ

6 させおはします。政道は卿<sub>キ</sub>局<sub>ノ</sub>のまゝなりければ、



7 人の愁歎もやます。吳王好<sup>コフミシカハ</sup>劍客<sup>ケンカク</sup>、天下<sup>テノカ</sup>疵蒙<sup>ヒトカ</sup>る輩<sup>ハヤ</sup>

8 不<sup>レ</sup>断。楚王愛<sup>セシカハ</sup>細腰<sup>サイウ</sup>宮中に飢<sup>ヘ</sup>て死する女多

四十九才1 かりき。上の好<sup>カミ</sup>に下は随<sup>ツ</sup>事なれば、世の危<sup>キ</sup>事を悲<sup>シ</sup>し

2 て、心有人<sup>コ</sup>の歎<sup>ナ</sup>悲<sup>ナ</sup>まぬはなかりけり。中にも二の宮は、

3 御学文不<sup>フコクラセ</sup>怠<sup>ヘ</sup>給<sup>ハ</sup>、正理を旨とせさせおはします。

爰

4 に文覚はおそろしき聖にて、いろふましき事

5 みいろひけり。此君を、如何にもして位に即<sup>ツ</sup>奉<sup>ム</sup>はや

6 と被<sup>レ</sup>思<sup>ハ</sup>けれ共、頼朝<sup>レ</sup>卿のおはしける程は叶<sup>ハ</sup>さりける

か、

7 建久十年正月十三日、頼朝<sup>レ</sup>卿年五十三にて失給<sup>シ</sup>

8 かは、頓謀<sup>レ</sup>反<sup>ハ</sup>をくはたてける程に、忽もれ聞<sup>キ</sup>えて、二

条

四十九ウ1 猪熊なる所に文覚坊宿所有ければ、官人共被<sup>レ</sup>付<sup>ケ</sup>て

2 八十に余<sup>ッ</sup>て召取<sup>ツ</sup>て終に隱岐<sup>ノ</sup>國へそ被<sup>レ</sup>流<sup>ス</sup>ける。文覚

3 京を出ける時、「是程老のなみに望<sup>ム</sup>て今日明日とも

4 不<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>身を、縦勅<sup>レ</sup>勘<sup>ナ</sup>なり共、都の辺<sup>ノ</sup>にも置給<sup>ハ</sup>はて、

5 遙<sup>シ</sup>と隱岐<sup>ノ</sup>國まで被<sup>レ</sup>流<sup>ス</sup>、及丁冠者こそ安から

6 ね。終には我流さる<sup>ノ</sup>國へむかへまいらせむする者を」  
と

7 申けるこそおそろしけれ。此君は余に及丁を好<sup>コ</sup>ませ

8 給しかは、文覚か様に悪口申ける也。されは承久に

五十才1 御謀反をこさせ給<sup>ハ</sup>て、國こそ多<sup>ク</sup>けれ、隱岐<sup>ノ</sup>國へ被<sup>レ</sup>

2 遷<sup>ル</sup>まし<sup>ク</sup>ける、宿縁の程こそふしきなれ。彼國

3 にても文覚か亡靈あれておそろしき事共多かり

4 けり。常は御前<sup>ノ</sup>へも参<sup>ッ</sup>て御物語申けるとぞ聞えし。

5 去程に六代御前は三位禪師とて高雄に行す

6 ましておはしけるを、「さる人の子也。さる人の弟子

なり。

7 縦頭<sup>ヲ</sup>をは剃<sup>リ</sup>たり共、心をはそらし」とて、安判官資<sup>スケ</sup>

8 兼に仰<sup>テ</sup>召捕<sup>ツ</sup>て、終に關東へそ被<sup>レ</sup>下<sup>ケ</sup>ける。駿河

五十ウ1 国住人岡辺<sup>ノ</sup>權守泰綱に仰<sup>テ</sup>、鎌倉の田越

2 河のはたにて終に被<sup>レ</sup>切<sup>リ</sup>にけり。十二歳より卅に余

3 まてたもちけるは、偏に長谷<sup>ノ</sup>觀音の御利生とそ

4 聞えし。それよりしてこそ平家の子孫は長く絶<sup>レ</sup>にけれ。

5 平家物語卷第十二

6 平家灌頂卷

7 女院出家 十

8 建礼門院は東山の麓、吉田の辺なる所に

五十一才1 そ立ち入らせ給ける。中納言法印慶恵と申、奈

2 良法師の坊也けり。住荒して年久成ければ、

3 庭には草深、簷には忍茂れり。簾絶閨露に

4 て雨風たまるへうもみえず。花は色々薫へとも、

5 主と頼人もなく、月は夜なく指入共、詠て明

6 す主もなし。昔は玉の台を瑩錦帳に被纏

7 て明し暮させ給ひしか、今は有とし有人には皆

8 別はて浅猿けなる朽坊に入給ひけむ御心の中、

五十一ウ1 被推量て哀也。魚の陸に上れるか如く、鳥の巢

2 を離たるか如し。さるまゝには憂かりし波の上、舟

3 の中の御栖るも今は恋しうそ思召されける。蒼波

4 路遠、寄思西海千里雲、白屋苔深、落涙東

5 山一庭月。悲無三云計。かくて女院は、文治元

年

6 五月一日、御髮落けり。御戒師には長楽寺

7 阿証房上人印誓とそ聞えし。御布施には先帝

8 の御直衣也。今はの時までもめたりければ、

五十二才1 御移香も未失。御形見に御らんせんとて西国

2 より遙くと都まで持給ひたりしかは、如何ならん

3 世までも御身をはなたしとこそ思召れけれ共、

4 御布施に成ぬへき物のなき上、且は彼御菩提

5 の為にとて泣く取出させおはします。上人是を

6 給て何と奏すへき旨もなくして、墨染の袖を

7 顔に押当て泣く御所をそ被罷出ける。件の

8 御衣をは幡に縫て長楽寺の仏前に被懸

五十二ウ1 けるとそ聞えし。女院は十五にて女御の宣旨を

2 蒙り十六にて后妃の位に備り、君王の傍に

3 候はせ給しかは、朝には朝政を進、夜はよを専に

4 し給へり。廿二にて皇子御誕生あて立皇太子

5 即位給しかは、院号蒙らせ給て、建礼門院

6 とそ申ける。入道相国の御娘なる上、天下の国母

7 にてましくければ、世の重し奉る事不斜。今

8 年十九にそならせましくける。桃李御粧猶

五十三才1 濃、芙蓉御姿も未衰、させ給はね共、翡翠

2 御簪付ても何にかはせさせ給ふへきなれば、遂に御

3 様をかへさせ給てけり。厭浮世、入真道給へ

共、御歎

4 は更不尽。人々、今は角とて海に沈し有様、先帝・

5 二位殿の御面影、ひしと御身にそひて、いかならん世

に

6 可<sub>レ</sub>忘共おほしめさせねは、「露の御命の何しに今まで  
 7 なからへてかゝる憂目をみる覧」とて、御涙せきあへ  
 8 させ給はず。五月のみしか夜なれば、明しかねさせ給  
 五十三ウ1 ひつゝをのつから打まとろませ給はねは、昔の事  
 2 をは夢にたにも御覽せず。壁に背ける残<sub>ノコシ</sub>燈影  
 3 幽<sub>カ</sub>に、終夜打<sub>ツ</sub>窓暗<sub>キ</sub>雨の音そさひしかりける。  
 4 上陽人か上陽官に閉られたりけん悲も、是には  
 5 過しとそみえし。昔を忍ふつまとなれとてや、故<sub>キ</sub>の  
 6 主<sub>ア</sub>の移し植置<sub>キ</sub>たりけん花橋の風なつかしく  
 7 軒近<sub>ツ</sub>かほりけるに、山郭公の二声三声音信て  
 8 とをりければ、女院故き事なれ共思召いて、御

五十四オ1 硯の蓋<sub>フタ</sub>にかうそあそはされける。

2 郭公花たちはなの香をとめて  
 3 なくはむかしの人や恋しき  
 4 女房達は、二位殿・越前<sub>ノツ</sub>三位上<sub>ノツ</sub>の様に、さのみた  
 5 けう水の底にも沈給はぬ<sub>下<sub>レ</sub>せ</sub>は、武<sub>キ</sub>のあらけなきに  
 6 とらはれて旧<sub>レ</sub>里に帰<sub>ル</sub>、老たるも若も様をかへ、姿<sub>カ</sub>を  
 7 やつし、有にもあらぬ有様共にてそ、思もかけぬ  
 8 谷底、岩<sub>イハ</sub>碯<sub>イハ</sub>にてそ、明し暮し給ける。住<sub>ス</sub>るし宿は

五十四ウ1 は<sub>（黒人）</sub>皆煙と上<sub>リ</sub>にしかは、空<sub>キ</sub>跡のみ残<sub>ツ</sub>て、しけき野へ

と  
 2 成つゝ、み<sub>（高<sub>ク</sub>な）</sub>〇れし人の問<sub>（高<sub>ク</sub>）</sub>参<sub>ル</sub>るもなし。仙家より  
 帰<sub>ッ</sub>て七<sub>ツ</sub>

3 世の孫に逢けむも、かくやと覺て哀也。去<sub>ル</sub>七月  
 4 九日<sub>ノ日</sub>の大地震に、築地も崩<sub>レ</sub>、荒たる御所もかたふ  
 5 き破<sub>レ</sub>て、いとゝすませ給ふへき御便<sub>リ</sub>もなし。緑衣監<sub>ノカシ</sub>  
 6 使<sub>シ</sub>、護<sub>ル</sub>宮門<sub>ノカシ</sub>たにもなし。心のまゝに荒たる籬は、  
 7 しけき野へよりも露けく、折しりかほに、いつしか  
 8 虫の声ゝうらむるも哀也。さるまゝには、夜も漸<sub>ク</sub>  
 五十五オ1 永<sub>ク</sub>なれば、いとゝ御ね覺めかちにて、明しかねさせ

給ひ

2 けり。尽せぬ御物思に、秋の哀さへうちそひて、いとゝ  
 3 忍かたくそおほしめされける。何事も皆かはりはて  
 4 ぬる浮世なれば、をのつからなさをかけ奉るへき昔  
 5 の草のゆかりも皆かれはてゝ、誰はくゝみ奉る  
 6 へしとも覺えず。

<sub>（高<sub>ク</sub>）大</sub>小原入 十一

8 され共、冷泉大納言隆房卿北方、七条修理大夫  
 五十五ウ1 信<sub>（ノツカ）</sub>隆<sub>（ノツカ）</sub>卿の北方より、忍つゝ、様<sub>（サマ）</sub>に吊被<sub>レ</sub>申

けり。女

2 院、「其昔、あの人共の育<sup>ハクミ</sup>にて有へしとは、露も思召

3 よらさりし物を」とて、御涙をなかせせ給ければ、付ま

4 いらせたる女房達も、みな袖をそぬらされける。此御栖

5 るも、都猶近て玉ほこの道行人<sup>ミチウヂ</sup>の人目もしけ

6 ければ、露の御命、風を待ん程は、憂事<sup>ウレコト</sup>不<sup>レ</sup>聞<sup>キ</sup>深山

7 の、奥の奥へも入なはやおほしけれ共、さるへき便<sup>ツ</sup>

8 もまします。ある女房の吉田<sup>下二七</sup> ○ 参て申けるは、

「大

五十六オ1 原山の奥、寂光院と申所こそ、閑に候へ」とそ

2 申ける。女院、「山里は物のさひしき事こそ有なれ

3 とも、世の憂よりは住よかむなる物を」とて、思召立

4 たせ給ひけり。御輿<sup>ミヤ</sup>などは、隆房<sup>トウボウ</sup>卿の北方より

5 御沙汰有けるとかや。文治元年長月の末に、彼

6 寂光院へ入せおはします。道すから、四方の梢の

7 色くなるを御覧し過させ給ふ程に、山陰なれば

8 によ、日も既<sup>下二七</sup> ○ 暮かゝりぬ。野寺の鐘の入逢の音

五十六ウ1 すこく、分る草葉の露しけみ、いと、御袖ぬれま

2 さり、嵐はけしく木の葉みたりかはし。空かきくもり、

いつ

3 しか打しくれつゝ、鹿の音<sup>カ</sup>幽に音信て、虫の恨も

4 絶く也。菟に角に取集<sup>ツ</sup>たる御心細さ、たとへやるへき

5 方もなし。浦つたひ嶋つたひせしか共、さすかかくは

6 なかりし物をと、思召こそ悲しけれ。岩に苔むして、

7 さひたる所なれば、栖<sup>ス</sup>まほしくそ思食す。露結ふ庭

8 の萩原霜かれて、籬の菊のかれくに、うつろふ

五十七オ1 色を御らんしても、御身の上とやおほしけむ。仏の御

2 前へまいらせ給ひて、「天子聖靈成等正覚、頓證善

3 提」と、祈申させ給けり。何の世にも忘かたきは先帝

4 の御面影、ひしと御身にそひて、いかならん世にも忘

へ

5 し共思召さす。さて、寂光院のかたはらに、方丈なる

6 御庵室を結び、一間<sup>ヒトマ</sup>をは御寝所に定め、一間をは

7 仏所にしつらひ、昼夜<sup>チウヤ</sup>朝夕の御勤、長時不断の

8 御念仏、をこたる事なくして、月日を被<sup>レ</sup>送給ひけり。

五十七ウ1 かくて神無月中の<sup>高二五〇</sup> ○ 暮方に、庭に散敷ならの葉

を、

2 物踏ならして聞えければ、女院、「世を厭所に、何者の

3 問来そや。あれみよや。忍へき物ならば、下、忍忍は  
ん」とて見せら

4 るゝに、小鹿のとをるにてそ有ける。女院、「さてい  
かにや」

5 と仰ければ、大納言佐局、涙を押して、  
6 岩根ふみ誰かはとはむ櫛の葉の

7 そよくは鹿のわたるなりけり  
8 女院、哀に思召て、此哥を窓の小障子にあそは

五十八才 1 し留させ御座ます。かゝる御つれゝの中に、思  
2 召なそらふる事共は、つらき中にも余多有り。軒

3 に双樹ルウヘキをは、七重宝樹とかたとれり。岩間に湛水  
4 をは、八功德水と思召。無常は春の花、風に随て散

5 易、有涯は秋の月、雲に伴トモナツて隠れ易。昭陽  
6 殿に花を翫し朝には、風来て匂を散し、長秋

7 宮に月を詠ユし夕には、雲掩光を隠す。昔は玉楼  
8 金殿に錦の褥シトホをしき、たへなる御高、すまじ栖成しか共、

五十八才 1 今は紫引結ふ草の庵いは、よその袂もしほれけり。

小原御幸 十二

2 かゝりし程に、法皇は、文治二年の春の比、建礼門院  
3 の大原の閑居の御栖居、御覽せまほしうは思召さ

4 れけれ共、きさらき・やよひの程は、風はけしく、余  
寒

5 も未つきせず。峯の白雪消やうて、谷のつらゝ  
6 も打とけす。春過夏来て、北まつりも過しかは、

7 法皇、夜をこめて大原の奥へ御幸なる。忍の  
8 御幸なりけれ共、供奉の人々には、徳大寺・花山院・

五十九才 1 土御門已下、公卿六人、殿上人八人、北面少々候けり。  
2 鞍馬とをりの御幸なれば、彼清原深養父フカヤフか補墮

3 落寺、小野皇太后宮の旧跡、觀覽アツあて、それより  
4 御輿にめされけり。遠山にかゝる白雲は、散りにし花

5 の  
6 形見也。青葉にみゆる梢には、春の名残を惜しまるゝ。

7 比は卯月廿日余の事なれば、夏草のしけみか  
8 末を分入せ給ふに、始たる御幸なれば、御らんしなれ

五十九才 1 たるかたもなし。人跡絶たる程も思召知れて哀  
2 なり。西の山の麓に一字の御堂あり。即寂光院、

3 是也。ふるう作なせる前水・木立、よしある様の所

4 なり。薨破<sup>イ</sup>ては霧不断の香を焼<sup>キ</sup>、柩落<sup>ト</sup>ては

5 月常住の燈をかゝく共、か様の所をや申へき。庭の

6 若草しけりあひ、青柳糸をみたりつゝ、池の浮

7 草浪にたゝよひ、錦をさらすかとあやまたる。中嶋

8 の松にかゝれる藤なみの、うら紫にさける色、青葉ま

六十 オ1 しりの遅桜、初花よりもめつらしく、岸の山吹さ

2 き乱れ、八重立雲のたえ間より、山郭公の一声も、君

3 の御幸<sup>ミユキ</sup>を待かほ也。法皇、是を叡覽<sup>イ</sup>あて、かうそ

4 思召<sup>シメ</sup>つゝけゝる。

5 池水にみきはのさくらちりしきて

6 なみの花こそさかりなりけれ

7 ふりにける岩のたえ間よりおちくる水の音さへ、ゆ

八十 ウ1 筆も及かたし。女院の御庵室を御覽<sup>ミ</sup>すれは、軒

2 には蔦<sup>ツ</sup>・槿<sup>ア</sup>はひかゝり、信夫<sup>シノブ</sup>まじりの忘草、瓢箪

3 しはくむなし、草顔淵<sup>ソウケン</sup>か巷<sup>カキ</sup>にしけし、黎藿

4 ふかくさせり、雨原憲<sup>アメハラケン</sup>か柩<sup>ト</sup>をうるほす共いっへし。杉

5 の葺目もまはらにて、時雨も霜もおく露も、もる月

6 影にあらそひて、たまるへし共みえさりけり。後は山、

7 前は野辺、いさゝ小篠<sup>コノ</sup>に風噪<sup>カザナリ</sup>、世にたゝぬ身のなら

8 ひとて、憂ふししげき竹柱、都の方の言伝は、間

六十一 オ1 遠に結るませ垣や、纒に事問ふ物とは、峯に木

2 伝<sup>ツ</sup>猿の声、しつか爪木の斧<sup>ノ</sup>、音、是等か音信<sup>イ</sup>な

3 らては、まさきのかつら青つゝら、くる人まれなる所

也。

4 法皇、「人やある、く」と被<sup>レ</sup>召<sup>レ</sup>けれ共、御いらへ申

者も

5 なし。良<sup>ア</sup>あて、老衰<sup>ラウサイ</sup>たる尼一人参たり。「女院はい

6 つくへ御幸なりぬるそ」と仰<sup>レ</sup>ければ、「此うへの山へ

花

7 つみに入せ給て侍」と申。「さこそ世を厭<sup>イ</sup>御習と云

8 なから、さ様の事につかへ奉るへき人もなきにや。御

いた

六十一 ウ1 はしうこそ」と仰<sup>レ</sup>ければ、此尼申けるは、「五戒十善

の 御果報つきさせ給ふによて、今かゝる御目を御らん

3 せられ侍にこそ。捨身<sup>シヤク</sup>の行に、なしかは御身を惜ませ

4 給侍へき。因果経には、「欲知<sup>ヨク</sup>過去因、見其現在果、

5 欲知未来果、見其現在因」とかゝれたり。過去・未来

6 の因果を兼てさとらせ給ひなは、つやく御嘆有

7 へからす。昔、悉達太子は、十九にて伽耶城をいて、  
檀

8 特山の麓にて、木葉をつらねてはたへをかくし、峯

六十二オ1 に上て薪をとり、谷に下て水を結び、難行

2 苦行の劫まがによつて、遂成等正覚し給ひき」とそ

3 申ける。此尼の有様を御覧すれば、身には絹・布

4 の分もみえぬ物を、結集むすてそ着たりける。あの有

5 様にても、か様の事申不思議さよと思召て、「抑汝

6 はいかなる者ぞ」と仰せければ、此尼さめくくと泣て、

7 しはしは御返事にも不た及。良あて、涙を押、「申に

8 つけて憚覚え侍共、故少納言入道信西ムスメか女、阿

六十二ウ1 波内侍と申し者にて侍也。母は紀伊二位、さしも御

2 いとおしみ深うこそ侍しに、御らんし忘させ給ふ

3 に付て、身の衰ぬる程思知れて、今更せんかたな

4 ふこそ高：おほえさふらへ侍侍」とて、袖を顔に押当て、しのひ

あへぬ

5 様、目もあてられず。法皇、「されは、汝は阿波の内

侍に

6 こそあんなれ。今更御らんし忘ける。只夢とのみこそ

7 思思召召」とて、御涙せきあへさせ給はず。供

奉の人々も、

8 「不思議の尼かなと思ひたれば、理て申申けり」と

そ、各

六十三オ1 感じ合れける。あなたこなたを叡覧あれは、庭の

2 千種露をもく、籬にたをれかゝりつゝ、そともの

3 小田も水こえて、鳴たつ隙もみえわかず。女院の

4 御庵室にいらせ給ひて、障子を引あけて御覧

5 すれば、一間には来迎ヒ三尊おはします。中尊の

6 御手には、五色糸を被懸たり。左ヒクシには普賢の画

7 像、右に善導和尚、并先帝御影をかけ、八軸の

8 妙文・九帖の御書も被置たり。蘭麝の匂に

六十三ウ1 引かへて、香の煙そ立上のはる。彼浄名居士の方

2 丈室シ内には、三万二千の床をならへ、十万の諸仏請給

ひ

3 けむも、かくやとそ覚ける。障子には、諸経要

4 文共、色紙にかいて所々にをされたり。其中に、

5 大江貞基法師か、清涼山セウにして詠ヒしたり

6 けむ、「笙歌遥聞孤雲コの上、聖衆来迎落日の

7 前」共被書たり。少引のけて、女院の御製

8 とおほしくて、

六十四才1 おもひきやみ山のおくに住るして

2 雲居の月をよそにみんとは

3 さて、かたはらを御覧すれば、御寝所とおほ

4 しくて、竹の御桁に麻の御衣・紙の御衾

5 などかけられたり。さしも本朝・漢土のたへなる

6 たくひ数をつくし、綾羅錦繡の粧も、さ

7 なから夢にそ成にける。供奉の人々も、まのあ

8 たりみまいらせし事共なれば、今の様に覚え

六十四ウ1 て、皆袖をそぬらされける。去程に、上の山より、

2 濃墨染衣きたる尼二人、岩のかけ路をつた

3 ひつゝ、おりわつらひ給ひけり。法皇えいらんあて、

4 「あれは何者ぞ」と仰ければ、老尼なみたをおさへ

5 て申けるは、「花形見ひちに懸、岩つゝし折副、

6 てもたせ給たるは、女院にて渡らせ給ひ侍なり。

7 つま木に蕨折具して侍ふは、鳥飼中納言

8 維実娘、五条大納言国綱養子、先帝御

六十五才1 乳母、大納言佐局」と、申もあへす泣けり。法皇

2 も哀けに思召て、御涙せきあへさせ給はず。女

3 院も、世をいとふ御ならひと云ながら、今かゝる有

4 様をみえまいらせすらむ恥かしさよ。消も失は

5 やと思食共、かひそなき。宵くことの閑伽、

6 水、結袂もしほるゝに、暁おきの袖の上、山路の

7 露もしけくして、しほりやかねさせ給けむ、山へも

8 帰らせ給はず、御庵室へもいらせおはします、あき

六十五ウ1 れてたゝせましくたる処に、内侍の尼参つゝ、

2 花かたみをは給りけり。

3 六道之沙汰 十三

4 「世をいとふ御ならひ、何か、くるしう侍へき。はや

5 く御対面あて、還御なしまいらさせ侍へ」と

6 申ければ、女院御庵室にいらせおはします。「一念

7 の窓の前には、撰取の光明を期し、十年の柴

8 の柩には、聖衆の来迎をこそ侍つるに、思の

六十六才1 外に御幸なりけるふしきさよ」とて、御見参

2 有けり。法皇、此御有様をみまいらせ給ひて、「非

3 相之八万劫、猶逢、必滅之憂。欲界六天、未免ニ

4 五衰之悲。喜見城之勝妙、樂、中間禪之高

5 台閣、又夢裏果報、幻間樂、既流転無窮也。

6 車輪のめくるか如し。天人五衰悲は、人間にも候

7 ける物かな。さるにても、いつかたよりか、こと問ま

いらせ候。



六十六ウ 1 8 何事につけても、さこそ古思召出候らめ」と仰ければ、女院、「いつかたよりも音信する事も侍はず。信隆・

2 隆房卿の北方より、たえく申送事こそ侍へ」。女

3 院、「其昔、あの人共のはこくみにて有へしとは、露も

4 思食よらさりし物を」とて、御涙を流させ給へは、

5 つきまいらせたる女房達も、皆袖をそぬらされける。

6 良あて、女院涙を押して申させ給けるは、「今かゝる

7 身に成侍ふ事は、一旦の歎、申に及侍はね共、後生

8 菩提の為には悦と覚侍也。忽に釈迦の遺弟に

六十七オ 1 つらなり、忝も弥陀の本願に乗て、五障三従の

2 くるしみをのかれ、三時に六根をきよめて、一筋に九

3 品の淨刹をねかひ、専一門の菩提をいのり、常に

4 は聖衆の来迎を期す。いつの世にも難忘は先

5 帝の御面影、忘れんとすれ共わすられず、しのはんと

6 すれ共しのはれず。只恩愛の道程、悲かりける事は

7 なし。されは彼御菩提の為に、朝夕のつとめをこたる

8 事侍はず。是も可然善知識と覚え侍ふ」と申さ

六十七ウ 1 せ給へは、法皇仰なりけるは、「それ我国は粟散辺土

2 なりといへ共、忝も十善の余薫に答へ、万乗のある

3 しとなり、随分一として心不叶といふ事なし。就中、

4 仏法流布の世に生れて、仏道修行の志あれば、後生善

5 所疑有ましき事なれば、人間のあたなるならひ、今

6 更驚くへきには候はね共、御有様みまいらせ候に、せ

7 かなうこそ候へ」とて、御涙せきあへさせ給はず。

8 女院かさねて申させ給ひけるは、「我身、平相国の女として、

六十八オ 1 天子の国母となりしかは、一天四海は皆掌のまゝなり

2 き。拝礼の春の始より、色々の衣更、仏名の年の

3 暮、撰録以下の大臣公卿にもてなされし有様は、

4 六欲・四禅の雲の上にて、八万の諸天に困遶せられ侍らん

5 様に、百官悉あふかぬものや侍し。清涼・紫宸の

6 床の上、玉の簾のうちにてもてなされ、春は南殿

7 のさくらに心をとめて日を暮し、九夏三伏の

8 あつき日は泉を結て心をなくさみ、秋は雲の

六十八ウ 1 上の月をひとりみむ事をゆるされず、玄冬

2 素雪の寒夜は、つまを重てあたゝかにす。長

3 生不老の術をねかひ、蓬萊不死の薬を尋

4 ても、只久からん事を思へり。明ても暮ても楽

5 さかえ侍し事、天上の果報も是には過しと

6 こそ覚侍しか。さても寿永の秋の始、木曾

7 義仲とかやに恐て、一門の人々、住馴し都を

8 は雲居のよそにかへりみて、古郷を焼野か

六十九オ1 原と打なかめ、古は名をのみ聞し、須磨より

2 明石の浦つたひ、さすか哀に覚えて、昼は

3 漫くたる浪路を分て袖をぬらし、夜は洲

4 崎の千鳥と共に泣あかす。浦く鳴く、よしある

5 所をみしか共、古里の事はわすられず。かくて

6 よる方なかりしかは、五衰必滅のかなしみとこそ

7 覚え侍しか。人間の事は、愛別離苦・怨憎

8 会苦、共に我身にしられて侍ふ。四苦八苦、

六十九ウ1 一として残る所さふらはす。さても鎮西をは、維義

2 とかやに九国の内をも追出され、山野広といへとも、

3 立よりやとるへき所もなし。同し秋の暮にも成しかは、

4 昔は九重の雲の上にてみし月を、八重の塩路に詠

5 つつ、明し暮し侍し程に、神奈月の比ほひ、清経

6 中将か、『都をは源氏か為に責おとされ、鎮西をば維

7 義か為に追出さる。網にかゝれる魚の如し。いつくへ

ゆか

8 は可遁かは。なからへはつへき身にもあらず』とて、

海に沈

七十オ1 侍しそ、憂事の初にて侍し。波の上にて日を暮

2 し、舟の中にて夜をあかす。みつき物もなければ、供

3 御を備る事もなし。適供御は備へんとすれ共、水な

4 ければまいらす。大海に浮といへ共、うしほなれはの

む事

5 なし。是又、餓鬼道の苦とこそ覚侍しか。室山・水

6 嶋、所々の戦に勝しかは、一門の人々、少色なをてみ

え侍

7 しか、一の谷とかやにて、一門の人々、又半過てうた

れ、む

8 ねとの侍共、数をつくひてほろひにしかは、各、直衣・

七十ウ1 束帯を引かへて、鉄をのへて身にまとひ、明ても暮

2 ても戦よはひの声の、たゆる事もなかりしは、修行

3 羅の闘諍、帝釈の諍も、是には過しとこそ覚侍

4 しか。一谷を攻落されて後、親は子にをくれ、妻は

夫に

5 別。沖に釣する舟をは、敵の舟かと肝をけし、遠き

6 松にむれるる鷺をは、源氏の旗かと心をつくす。

7 さても壇浦とかやにて、戦は今日を限とみえしかは、

8 二位の尼、申置事付き。『男の命生残らん事は、千

七十一オ 1 万か一も難有。設遠ゆかりは生残たりと云共、我等

2 か後生を吊はむ事も有かたし。昔より女を殺さ

3 ぬならひなれば、いかにもしてなからへて、主上の御

菩提

4 を吊、我等か後生をも助給へ』と、申侍しか、夢の如

に

5 覚侍し程に、風忽吹おほひ、浮雲あつく襲

6 き、兵心をまとはし、天運尽て人の力にも及かたし。

7 既かうと見えしかは、二位の尼、先帝をいたきまいら

8 せて、ふなはたへ出し時、あきれたる御有様に、

『抑尼

七十一ウ 1 せ、我をはいつちへ具してゆかんとするぞ』と仰け

2 れは、二位の尼、涙をはらくと流して、いとけなき

3 君にむかひまいらせ、『君は未しろしめされ侍はずや。

4 先世の十善戒行の御力によて、今万乗のあるし

5 とは生させ給へ共、悪縁にひかれて、御運既尽させ

6 給ひ侍ぬ。先東にむかはせ給ひて、伊勢大神宮、伏

7 おかませおはしまし、其後西に向はせ給ひて、西方浄

8 土の来迎にあつからむと誓はせおはしまし、御念仏侍

ふ

七十二オ 1 へし。此国は、心うき界にて侍へは、極楽浄土とて、

目

2 出度所へ具しまいらせ侍ふぞ』と、泣く遙にかきくと

3 きしかは、山鳩色の御衣にひんつらゆはせ給て、御涙

に

4 おほれ、ちいさうつくしき御手を合、先東にむかは

せ

5 給て伊勢太神宮に御暇申させ給ひ、其後西に

6 向はせ給て御念仏有しかは、二位の尼、先帝をい

7 たきまいらせて海に沈し有様、目もくれ心も消は

8 て、忘んとすれ共忘れず、忍はんとすれ共しの

七十二ウ 1 はれず。残留る人々の、おめき叫し有様は、叫喚・

大

2 叫喚のほのほの底の罪人も、是には過しとこそ覚侍し

か。

女院往生 十四

4 さて、武のあらけなきにとらはれて、上侍し程に、

播

- 5 磨国明石浦とかやに着て、ちとまとろみたりし
- 6 夢に、昔の内裏には遙にまさりたる所に、先帝を
- 7 始まいらせて、一門の人々、皆ゆゝしけなる礼儀にて
- 8 侍しを、『都を出て後、未かゝる所をみす。是をはい

七十三オ 1 くと云そ』と問侍しかは、二位の尼と覚侍て、『龍宮  
2 城』と答侍し時、『目出たかりける所かな。是には苦  
はなき

3 か』と問侍しかは、『龍畜経の中にみえて侍ふ。能く  
後

- 4 世を助給へ』と申すと覚えて夢さめぬ。其後は、
  - 5 殊に経よみ念仏して、彼御菩提を吊奉る。是
  - 6 皆、六道にたかはしとこそ覚侍へ』と申させ給へは、
  - 7 法皇仰なりけるは、『異国の玄奘三蔵は、悟の前
  - 8 に六道を見、我朝の日蔵上人は、蔵王権現の御
- 七十三ウ 1 力によつて六道をみたりとこそ承れ。まのあたり御
- 2 らんせられけるこそ、難有候へ』とて、御涙をなか
  - させ給へ
  - 3 は、供奉の人々も、皆袖をそぬらされける。女院も御

4 涙をなかせ給へは、つきまいらせたる女房達も、又  
袖

- 5 をそぬらされける。去程に、寂光院鐘声、今日
- 6 も暮ぬと打しられ、夕陽西に傾は、御名残はつ
- 7 きせず被思食けれ共、御涙を押して還御ならせ
- 8 給ひけり。女院は、いつしか昔をや思召出させ給ひ

七十四オ 1 けん、忍あへぬ御涙に、袖のしからみ、せきあへさせ  
2 給はず。御後を遙に御覽し送て、還御も

- 3 漸く延させ給へは、御本尊に向はせ給て、「天子
  - 4 聖霊、一門亡魂、成等正覚、頓證菩提」と、い
  - 5 のり申させ給ひけり。昔は先東に向はせ給ひて、
  - 6 伊勢太神宮・正八幡宮、伏おかませおはしまし、「天
  - 7 子保算、千秋万歳」とこそいのり申させ給ひ
  - 8 しに、今は引かへて、西に向はせ給ひて、「過去聖霊、
- 七十四ウ 1 必一仏土へ』と祈せ給ふこそ悲しけれ。女院、御障
- 2 子に二首の歌をそあそはされける。
  - 3 このころはいつならひてか我ころ
  - 4 大みや人の恋しかるらん
  - 5 いにしへも夢になりにしことなれば
  - 6 柴のあみ戸もひさしからしな

7 又、御幸の御供に候はれける徳大寺の左大将実  
8 定公、御庵室の柱に書つけられけるとかや。

七十五オ 1 いにしへは月にたとへし君なれと

2 そのひかりなき深山辺のさと

3 来し方行末の、うれしうつらかりし事共、思食

4 つけて、御涙にむせはせ給ふ折節、山郭公の

5 二声三声音信てとをりければ、女院、

6 いさゝらは涙くらへんほとゝきす

7 我もうき世にねをのみそ啼

8 抑、壇浦にて生なからとらはれし廿余人の人々、

七十五ウ 1 或は首をはねて大路を被渡、或は妻子にわかれて

2 遠流せらる。され共、四十余人の女房達の御事は、

3 沙汰にも不<sub>レ</sub>及。親類に随ひ、所縁につめてそまし

4 くける。しのふ思はつきせねと、なげきながらも、

5 さて（高こそ）すこされけれ。上は玉の簾の内までも、風

しつ

6 かなる家もなく、下は柴の柩の本までも、塵お

7 さまれる宿もなし。枕を双し妹瀬も、雲井の

8 よそにそなりはつる。やしなひたてし親子も、

七十六オ 1 行かたしらす別けり。是は、入道相国、上は一人をも

2 恐す、下は万民をも顧す、死罪・流刑・闕官・

3 停任、思ふ様に常に被<sub>レ</sub>行しか、いたす処也。父祖の

善

4 悪は、必子孫に及といふ事は、疑なしとそみえたり

5 ける。かくて女院は、むなしう年月を送らせ給

6 程に、例ならぬ御心地いてきさせ給て、うちふさせ

7 給ひしか、日比より思召まうけたる御事なれば、仏

8 の御手の五色の糸をひかえつゝ、「南無西方極樂

七十六ウ 1 世界教主弥陀如来、本願あやまたす、浄土へみち

2 ひき給へ」とて、御念仏ありしかは、大納言佐局・阿

3 波内侍、左右に侍て、今をかきりの御名残の惜

4 さに、こゑくにおめきさけひ給ひけり。御念仏の

5 こゑ、やうくよはらせましくければ、西に紫雲

6 襲、異臭室にみちて、音楽空に聞ゆ。かき

7 りある御事なれば、建久二年二月の中旬に、一

8 期遂におはらせ給ぬ。きさいの宮の御位より、

七十七オ 1 片（カク）時もはなれまるらせすして候はれしかは、別

2 路の御時も、やるかたなくそ思はれける。此女房達

3 は、昔の草のゆかりも皆枯はてゝ、よるかたもなき

4 身なれ共、折くの御仏事宮給ふそ哀なる。

5 遂に此人くも、追龍女正覚跡、如韋提希婦人、  
6 皆往生の素懐をとけゝるとそうけたまはる。

7 平家灌頂卷

七十七ウ

1 喜福内匠助

2 慶長拾年八月吉日

付記

愛知県立大学付属図書館蔵の慶長書写『平家物語』の翻刻を始めたのは平成三年のことです。当初、私は愛知県立大学在任中に完成したいと考えていました。が、諸般の事情で計画どおり進まず、巻第九を愛知県立大学『説林』第46号に掲載した後、平成十二年三月に退職することになりました。その間、『国文学年次別論文集』〈明文出版、学術文献刊行会〉にも各巻ごとに再録され、巻第六まで進んだ時に佐伯真一氏の目に留り、この本文が京師本の特徴を有することが判明しました。そして、巻第四以降の巻末に「喜福内匠助・慶長拾年（一六〇五）八月吉日」という識語があり、価値のある古写本として同氏により『文学・語学』（全国大学国語国文学会編）第156号に紹介されました。また、本書のことは同氏の校注『平家物語』（三弥井書店刊行）下巻の解説にも取り上げられています。

このような事情もあり、私は以後勤務することになった岐阜聖徳学園大学教育学部の国語国文学会の皆さんにお願いして、一昨年巻第十、昨年巻第十一、そして本年巻第十二と灌頂巻を掲載させていただきました。十七年の歳月が経過し、本翻刻をやっと終えることができました。この間、佐伯真一氏をはじめ多くの方々に御指導・御支援を賜りましたこと、厚く御礼申しあげます。

〔既刊〕 愛知県立大学付属図書館蔵

慶長書写『平家物語』 翻刻

卷第一 『愛知県立大学文学部論集』（国文学科編）第41号、

平成五年二月刊行。

『国文学年次別論文集』平成五年、〈朋文出版、学術文献刊

行会〉再録

卷第二 愛知県立大学『説林』第39号、平成三年二月刊行。

『国文学年次別論文集』平成三年、〈朋文出版、学術文献刊

行会〉再録

（巻第三は欠巻）

卷第四 『愛知県立大学文学部論集』（国文学科編）第40号、

平成四年二月刊行。

『国文学年次別論文集』平成四年、〈朋文出版、学術文献刊

行会〉再録

卷第五 愛知県立大学『説林』第41号、平成五年二月刊行。

『国文学年次別論文集』平成五年、〈朋文出版、学術文献刊

行会〉再録

卷第六 『愛知県立大学文学部論集』（国文学科編）第44号、

平成八年二月刊行。

『国文学年次別論文集』平成八年、〈朋文出版、学術文献刊  
行会〉再録

卷第七 愛知県立大学『説林』第44号、平成八年三月刊行。

『国文学年次別論文集』平成八年、〈朋文出版、学術文献刊

行会〉再録

卷第八 『愛知県立大学文学部論集』（国文学科編）第45号、

平成九年八月刊行。

『国文学年次別論文集』平成九年、〈朋文出版、学術文献刊

行会〉再録

卷第九 愛知県立大学『説林』第46号、平成十年三月刊行。

『国文学年次別論文集』平成十年、〈朋文出版、学術文献刊

行会〉再録

卷第十 岐阜聖徳学園大学『国語国文学』第20号、

平成十三年三月刊行。

卷第十一 岐阜聖徳学園大学『国語国文学』第21号、

平成十四年三月刊行。

卷第十二 岐阜聖徳学園大学『国語国文学』第22号（本書）、

平成十五年三月刊行。